

【論 文】

ルートヴィヒ・ホール『覚書』を読む 思索と表現 1)

吉 用 宣 二

思索

ルートヴィヒ・ホール（1904-1980）の『覚書』Die Notizenは、1933から1936年にオランダで「最大の精神的な荒野」（S.5）の中で書かれた。それはホールの死の年に、一卷の本としては初めて Suhrkamp Taschenbuch 1000 として現れたが、おおよそ 1,800 の「断章」から成っている。それは 1930, 40 年代の黙示録的な時代における一人の精神の記録である。本稿は、それを読む試みであるが、アフォーリズムの統一のない集合に見える『覚書』を私は、思索と表現に分けて考えることにした。しかし、思索とその表現が緊密に結びついているところにホールの特質がある。あるいは思索をどのように言語的に表現するかがホールの主要な関心事だった。思索は、その強度に対抗できる形で表現されなければならない。十全に表現されていない思考は、思考ではない。小説を書いていたホールにとって、表現は最も重要な要件である。思考をどう表現するかが、思考を検証させるという形で、ホールは思考し、表現した。表現と思考がやすりのように互いを磨いたのである。本来それらを分割することはできないのだが、本稿では比重の大小という意味で、「思索」と「表現」の二項目を設定し、『覚書』を読むことにした。

1 遺産としての知恵

ホールの思索は、哲学の分野に属しているものではない。彼が表現する考えは、生の「知恵」である。その「知恵」は自然科学の知とは異なる。「アルキメデスの原理は、いわば次の日から、どの平均的な知性によっても確かめられることができた」。知識は伝達されることができる。一方、知恵において「われわれの最後の業績は、同じ高さに再び到達することの中にある。というのは、知恵、— 全般的な眺望、全体的なものに対する予感の高さ— は伝達されることができないからだ」。「知恵の事柄においてはただ、一つのすでにあっ

たものに再び到達することが問題である」。そしてホールは「知恵」を「可能な限り最高の全体予感、あるいは、人間の知識の最良の利用」と言う。「ここで〈利用〉が〈実践的なもの〉を意味していないことはおのずと明らかである。(それは知恵ではなく、技術だろう)。そうではなく、全体予感と親和したもの、通常の実践的なものよりも、はるかにより高い意味で実践的なもの。科学的な認識を可能な限り最高に満たすこと *Durchdringung*。というのは、科学的な認識だけでは価値がない、それは満たされていることを欲する。何でもって満たすのか。君の生でもって。君の意識でもってか。君の意識の生でもって。 - 意識からやってきて、意識の方へ行こうと努める生、意識の多くを持っている生でもって¹⁾」。

知恵は、「生でもって、生の意識でもって満たされる」価値である。それは伝達されない、保存されない。「われわれが生の中から死の中に何も一緒に持っていくことができないことを誰もが知っている。しかし誰が同様に偉大な真理、われわれが何かある価値から何も生の中に持ち込まなかったということを知っていようか。ある人が一緒に持っていくことのできたすべては、諸条件であった。価値を、もし彼が何かの価値を持ちたいと望んだのなら、彼は時間から時間に、分から分に産み出さねばならなかった。／というのは、価値は保存されることができないからだ。これがまさにすべての変革の意味である。保存されえない価値を何度も現存するようにさせること。君は燃えている。炎が価値だ」(I/45)。

過去の価値を現在に伝達すること、「今の生で、今の意識で満たすこと」、それはホールの「思想」である。「前日の、すでに自然の中に沈み込んでしまったものごとを思い出そうとする規律のある試みの際に、奇蹟が人の前に立ち上がる。そこには、伝達が歩いたところに、光の痕跡の知覚がある。記憶は個々の人間で終わったり始まったりするのではなく、何世代を通じて遡って伸びているからである。 - そして突然われわれはこの道の途上でいわゆる直観そのものの本質についての解明を獲得する」(II/40)。過去の思索＝価値は書かれたものの中にある。「どれほど言葉が貴重なものごとであるか忘れられてはならない、いつか種のように開花する貴重なものごとであるか。それらは、 - 人はそれらを物質のように保存できる - 記憶の中に保存されて - 最大のアクションまで自分の時を待つ、何年も後に力の中に輝かしく目覚めながら」(II/34)。それを見つけ出すことは「引用」の方法によるが、現在の生で満たすことは「引用」を越えて行く。

「遺産。偉大な男たちの指示に従って生きることは容易ではない。人は文章に従って生きることができる。その危険は、無意味性である。他の方向は、次のことである、文が変えられ、広げられなければならない、だからその文面によって拘束されるのではなく、あの思考

¹⁾ 「47 到達可能なものと到達不可能なものについて」。In: Hohl, Ludwig: Nuancen und Details. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1990, S.86ff.

方法の全体から新しい文を形成することをあえてするということの知。その危険は、まったく別のものが生まれるということである。／良き道、正しい継承の道はどこにあるのか。それはただ重いものの中のみ見出される。－ それはただ、人が似たように体験すること、あの男の文の中に表明されないものを再発見することによってのみ可能である。－ 人が総体からあれらの文を再び形成することができ、それでもって、同じ苦勞をして、相応する新しい文を形成することができることによって。－ いったい前者の文は作用していないのか。もちろん、作用している。しかしただ、人が自分の力で一つの大きな近さに達したならば。その時、火花がこちらに飛ぶ」(II/203)。

過去の文を読み、その思索を辿り、さらに継続すること、それがホールの引用の方法である。そしてその経過を、思索に拮抗する強度でもって表現することをホールは試みた²⁾。

2 私はどうのように語るか

人類の記憶の中に価値を見出し、それを生で満たす＝解釈し、文で表現すること、それが『覚書』の内容である。『覚書』を読むことは、ホールの方法によればその思索を継続しそれを自分の言葉で表現する(生で満たす)ことである。だが、私はたちまち、困難の前に立たされる。ジャンルを規定することは、解釈の入り口であるが、これら多数の「断章」はいったい何か。ホールは序文で述べる。「しかし作品は人がその統一性を把握する前に、正しく把握されることはできない。これはアフォリズム集ではない」(S.5f.)。しかし「全体に一つの構造を与える」(S.5)という意味の「統一性」を多数の「断章」から見出すことは困難である。メランコリーの克服という概念によって、ホールの物語形式から反省的形式への文体の変化を論じた Sabine Haupt は、『覚書』の「統一性」に懐疑的である。「ホールによって求められた〈統一性〉においては統一的な、個々のものを一定の原理に従って秩序つけられた構造の中へ典型的に割り当てることは別のことが問題となっている」³⁾。しかし、解釈と

²⁾ 「IX/1 精神的な発見の新しさ」の中で、ホールは様々な引用をしている。「しかし私はアイデアに関して、新しいか古いかについて気にとめない！」(ヴァレリー)。「先祖からゆずり受けたものは、それを真にわが物とするには、自分の力で手に入れなければならぬ」(『ファウスト』)。「すべての賢明なことはすでに考えられた、人はただそれを新たに考えることを試みなければならない」(ゲーテ『箴言と反省』)。「最近の時代のもっともオリジナルな著者たちは、彼らが新しいものを産み出すからオリジナルなのではなく、同じものごとを、まるでそれらが以前には決して言われなかったかのように、言うことができるがゆえにオリジナルなのだ」(ゲーテ『箴言と反省』)。「しかし彼が論じる素材が新しくないとしても、その配列が新しいのである。昔の言葉を使うからといって人々に非難される作家のことを、私は敬愛したいと思う。あたかも同じ思想が異なった配列によって別の言説体を形作らないように、かつまた、同じ言葉の数々は、異なった配列によって別の思想を形成するように」(パスカル『パンセ』)。

³⁾ Haupt, Sabine : „Schwer wie ein weißer Stein“. Bern (Peter Lang) 1997, S.208.

は何かについて「統一的」な言説を形成することであるので、Hauptも、その文体を「思考散文 Denkprosa」⁴⁾と定義することによって解釈の「統一性」を与えている。

私は「統一性」を考えるために、その反対概念である「個別性」を設定したい。ホールの最初の「思考散文」的な作品は『ニュアンスと細部』(1939)である。『覚書』では何よりも「個別性」が論じられる。「輝きは細部から突然現れる、そして全体を創る」(II/176)。「この人は個別なものにこだわり、全体を変える」(I/23)。「人が個別なものを来たるべきものの、全体的なものの前段階と見なすならば、人は失われている。人は個別なものに完全に向かわねばならない。それが過ぎ去るとすぐにそのままにしておかねばならない」(XI/11)。Paul Goodは哲学の立場から述べる、「私を一番魅了するのは、ホールの著作が、創造者の例に関して、差異の権利、個別なもの、固有のもの、異なったもの、ニュアンス、細部の権利を代表していることである」⁵⁾。Goodは、『覚書』の中のスピノザの『エチカ』からの「我々は個物をより多く認識するに従ってそれだけ多く神を認識する」(IX/21)を例として挙げている。その個別性の表現に、それぞれが独立した命題であるアフォリズムは適合した形式である。しかし、スピノザが短い命題を幾何学的に構築する方法を作り上げたように、アフォリズムはその短さによって、その断絶性を克服しようとする志向を産み出す。個別性を結び付ける「統一性」へと思考が移動する。哲学体系のように統一性があらかじめ設定されているのではなく、個別性の海の中に、次第に一つの航路が形成されてくる。「流れが断片の中を通っていくならば、断片はまさにもう断片ではない。その時、法が再びある。すべてが依存している法が」(VII/146)。

ホールは伝説に包まれた人間であった。(スイスの記録映画作家 Alexander J. Seiler は1982年に記録映画『ルートヴィヒ・ホール。断片の中の一つのフィルム』を作った)。彼はジュネーヴの労働者地区の中の地下室に住んでいた(1954-1975年)。その地下室には多数の紙片が洗濯ロープに洗濯ばさみで留められていた。この洗濯ロープ方法を Stadler は「紙片経済」⁶⁾と呼び、その思考のための合理性を分析している。それらの紙片は加筆され、削除され、別の紙片と重ねられ、順序を変えられる。ホールは時間的経過順の最初の原稿を訂正し、加筆し、新たに構成した。その構成的「統一性」は何よりも章の構成に示される。12の「章」(「労働について」、「到達可能なものと不可能なもの」、「語る、しゃべる、沈黙する」、「読者」、「芸術」、「書くこと」、「雑録 *Varia*」、「薬剤師」、「文学」、「夢」、「死について」、「形象」)は

⁴⁾ Haupt : Ebd., S.215.

⁵⁾ Good, Paul : *Einzelnes eigenes Leben zur Erkenntnis bringen, das ergibt allemal Kunst.* In : Ludwig Hohl (1904-1980). *Akten der Pariser Kolloquiums.* Bern (Peter Lang) 1994, S.101.

⁶⁾ Stadler, Ulrich : „Die Notizen“ oder Von der unerreichbaren Vollendung einer Sammlung. *Versuch einer Gattungsbestimmung.* In : *text + kritik* 161 Ludwig Hohl. München (edition text + kritik) 2004, S.43.

異なるカテゴリーである。第7章に「雑録」があり、さらに「雑録」に対する付録（「自伝的なもの」）が続く。「夢」の章は、ホール自身の夢の記録である。童話、寓話、ボードレールの『パリの憂鬱』のような街頭スケッチ、多数の引用がある。「統一性」を語るのはますます困難となる。「体系的な哲学論文が問題となるのではなく、互いに緩やかに配分された、部分的には相互に矛盾しているテキストたちの集合」と Haupt は言う⁷⁾。だが Stadler は「『覚書』が置く（統一性の）要求をもっと真剣に取る」⁸⁾ことを提案する。『覚書』の第一巻（1944年）の Arnim Mohler による書評、「人は個別なものそれ自体を取ってはならない。作品は関連の中で読まれなければならない」（VIII/7）。「統一性」は遡って言及されている。ホールは『覚書』の断章群を書き上げ、それを読み、その時間的な距離からその統一的なものを考えた。ホールがしたこと、統一性を読み取ることを『覚書』は読者から要求している。ホールは本を、その本が作り出す読者として読んだ。そしてホールは作品によって読者を作り出し、その読者はホールのように「統一性」を作り出すだろう。人間が生から「豊かである」ことを要請されているように、読者も同様に要請されているという自己言及的な構造からホールの散文の力は来ている。「世界の一つのスケッチのもう一つのスケッチ。断片的なものの確定的なもの。／一人の人間が君に書いてくる、これは手紙ではない、そうではなくいくつかの覚書、抜粋である、関連なしに並べられたものである、と。／しかし受取人である君はそれを手紙として把握する。距離があるところではすぐに、それは一つの手紙である。死はとりわけ、一つの生の結果に対する距離を与える」（XI/16）。

3 精神史

ホールは多数の断章を結び付ける流れを作ろうとした。その流れは精神の運動が描く軌跡である。ホールにおいて、精神の活動が問題となっている、それゆえに『覚書』は「精神的労働者」にとっての一つの羅針盤となるのである。しかし精神とは何か。ホールは概念を形成し、その概念を用いて探究する哲学者ではない。精神の概念を読者は様々な文から作り出すことを要請されている。前述した価値、知恵の主体として規定される精神だが、「精神」についてのホールの表現を読むことで、私たちはホールの世界に導かれるのである。

精神は力学的な用語で語られる。「一人の人間の精神の強さは不安の状態の中で測られる。（…）精神的に強い人間はまさに最高の危険の中で、できるだけ早く理性にその避難所を探し求める、彼は理解力によってとりわけ救いを探し求める！」（II/17）。精神はまた量である。

⁷⁾ Haupt : Ebd., S.228.

⁸⁾ Stadler : Ebd., S.49.

「〈一つの世界〉を自分の中に持っている人たち（創造的な人間たち）、彼らは**位階**あるいは**段階**に従えば、より高いところにいるのではない、そうではなくより大きな**量**なのだ」(XII/21)。

精神はそれ自体としてあるのではなく、世界を通してのみ現実的な形を取る。「科学が発見することが多ければ多いほど、人は強い精神と弱い精神の相違をいっそう明瞭に以下の細部において見ることができる。つまり弱い精神は、すぐに終わる。強い精神にとっては、視線は世界の無限性にますます多く向けられる」(XII/56)。世界の中で精神は、肯定する力である。「市民は人間を否定的なものに関して測定する - 悪い特性を持っていない人は、良い - 精神的に働く人は肯定的なものに関して測定し、言う。良き特性を持っていない人は、悪い」(II/ 191)。「精神にとって世界は常に若い。精神の本質は、いつも朝を考えることができるということの中にある - だから永遠の朝を。(…) (来たるべきものへ向かうことが繰り返されるので、その線は一定不変なままである。われわれの中に不変性が生まれる、とりわけ最高のものの不変性が、つまり精神の線が)」(XII/66)。「精神的な意志 - 探求意志 - はあまりに大きく、あまりに内在的である。それは彼らに最高の享樂の中、彼らが企てるすべての中にまで同伴する。その意志は彼らすべてよりもっと強力である。すべての問いの外に置かれているその意志は月のように一緒に移動する。(…) そしてそのように彼は上昇し上昇した、そしてついに彼は見た。／彼は世界を見た。 - そして彼は見た、すべてが**欺瞞**で、**空虚**であるわけではないこと、無駄ではない格闘や行動が存在していること、そこから殻が突然衣類のように落下する行為や生が存在することを。そしてそこに - - 一つの意味 *SINN* が、一人の人間が、一人の**最高**の人間が、愛が立っている」(XI/41)。1930年代に世界を、人間を肯定することは容易なことではない。貧困、悲惨、不安、戦争が世界を覆い始めていた。そして精神とは、その悲惨を承認するのではなく、それにも拘わらず人間、生と世界を肯定する力の謂いである。そしてそれが精神の力なのだ。

精神は自律的な運動として考えられている。精神は世界を巡り、そして回帰する。「人間は、再び自然となるために、最初に自然との断絶を見なければならぬ」(II/ 140)。「私もまた、世界はむしろ善(肯定的)であると信じる。(…) 生は本質的に苦悩であるから。どのように、すべての状況において、**精神**がものごとから別れるか見ること、それが幸福である」(XII/13)。

精神は反省的な知である。「人間の偉大さ - 人間が持っている希望、偉大さへの道 - は、人間の矮小性の認識、人間の相対性、つまり人間の周囲の計り知れない夜の中の関連の認識の中にある。夜の支配の中にはない、**全体的なもの**の**支配**の中にはない、そうではなく、彼自身の線の引き方の清潔さの中に、**彼の歯車装置**の明晰さの中にある。一つの小さな時計のように人間はサハラの無機的なカオスの真ん中にある。彼の機能することの明

晰さと正確さの中に、彼の偉大さがある。彼の小さな円を照明することの中に。しかしペンがペンとして仕えようとすれば、その時ペンは爆弾以上のものとなるだろう」(II/104)。

精神のさまざまな属性（それは精神の「個別実行」である）。精神が「受肉」され、精神的人間となる。精神は具体的な現象を通して現れる。「私は謎をまったく愛していない。私は謎を否定しない」(II/289)とホールは言う。ヘーゲルのように「現実的なものは合理的である」。どんな非合理的なことも、その隠された合理性を持っている。「人間の理性は、真剣さの前で霧散する子供遊びではない。そうではなく真剣な事柄である。一つのものを除いて、つまり世界を除いてすべてよりももっと強力な、最も真剣な事柄である」(II/130)。「偉大な知性、何らかの才能と結び付けられ、意志でもって応用されたそれは、常に業績と発見に導く。偉大な知性は稀である。才能は頻繁にある。両者が意志でもって応用されることはもっとも稀なことだ」(II/80)。そのすべての働きが精神である。

「認識はわれわれを救う」(XII/16)。ホールの多くの文は定義ではなく、「要請」,「命令」である。精神の活動を命令している。「*知の種類*。問題となっているのは、巨大に多くを知ることではない、そうではなく正しい時間に正しいことを知ることである。大変多くを同時に知るといふことは、図書館の事柄である、人間は歩きまわる図書館ではない。／どの瞬間も最高のものを与える準備をしている。人はただそれを受け取ることができなければならない。この受け取ることができるということ - それが最高の知なのだ」(II/200)。

精神は具体的には認識という姿をとるが、それをホールは鏡のメタファーで語る。「鏡。生きている木々を直接測定することは困難である。人はそれらをその影において容易に測る。多くの極度に重要なものごとをわれわれはまず鏡の中に認識する、例えばわれわれ自身を化学反応において、あるいは人間を彼の行為において認識する。現在の*共同体運動*の鏡は、それが関係を持っている過去の時代である」(VII/113)。

認識に関しては「見る」の比喩で語られる。「見る *sehen / see*」は「理解する」と同義であるが、ホールは例えば、「見る」を表層的にとらえる。「ものごとへの二つの関係が存在している。I 存在あるいは理解(同一化すること)。II 見ること。それらは一緒に現れない。重要なことは、IIは、Iが存在する限り、在ることはできないということだ。例えば、〈私は空を見る〉。ただ、私が空の本質を放棄することによって、空間に次ぐ空間を放棄することによって、ただ私が同一化されていない、理解によって満たされていないならば、私は〈空〉を見ることができる(青いなど)。／私は一つの惑星を、私とその惑星の理解(同一化)によって貫かれていない限り、ただ見ることができる。同様に私自身を」(XII/22)。ホールはそれを次のようにパラフレーズする。「いつでも何度でも、私がかつて(数年前に)月について聞いたことが、私の心に浮かぶ、何度も私はそれを書きあげようとした、そしてついに私は

それを書きあげなければならない。そしてそれがそうこうするうちにもう真でなくなっていると、それは今なお、真である以上に真である。われわれは月の風景を、われわれ自身の地球のある地域よりももっと正確に知っている」(XII/23)。ホールにとって認識の内容に劣らず、その表現が重要である。だから、言葉遊び的に、「もし眺めること *schauen* と身震いすること *erschauern* が語源的に関連しているのなら、素晴らしいだろう」(XII/45)。あるいはメタファーによって、「光の強さ - 日光よりも明るいのはただ眼だけである」(XII/47)。

「見る」は最も日常的な認識の一つだが、おそらくそれゆえに人は「見て」いないのだ。観察について。「私が小さな都市の森の中を歩いているとき、私が出会うこれらの人々。彼らが、彼らの上方で体操をしているリスを見ないということ、彼らのでっぴり肥った歩みから草の中に素早く逃げる小さなネズミに気づかないということ。彼らが内的なものを見ないということ」(VIII/12)。「すべてを観察によって。すでに一つの事柄を考えている人は、ほとんどそれに対する視線を必要としない。 - ただ決定的な視線を」(XII/76)。

過去の認識は視覚的な比喩によって表される。「金メッキする遠方。 - 道路を放浪する。様々な不足が私にそうさせたのだ、手段もなく、人間との交際もなく。それらが今日起こったように昨日起こった重い妨害、生産の持続的な喪失を検討しながら。 - それに対して古代人たちの理想像を掲げながら（古代人たちはいつも完全な生産の中に、囲まれ、促進されていた！）、私は突然、一つの予言的な観念の中でのように、またどの顔の中にも、どの形象の中にも、ものごとは、それらが非本質的なもの（中断させるもの、荒涼としたもの、否定するもの）を立ち去らせ、ただ特別なものを再現するように、互いに近寄ってくることを思い出す。そしてそれが私に、私の放浪の中でも同じ放浪を見ることを可能にする」(XII/11)。「遠方の中のごぶ状に隆起した地面は磨かれた板の滑らかさを獲得した。〈以前 …〉。以前とは一つの理想状態だった。 - しかしただ、君がもっと鋭くそちらを見ないので。実際には当時、永遠の上昇と下降、苦境からかろうじて救われることが永遠に回帰する状態があった」(XII/143)。

Seher（見る人）は「預言者」のことである。「すでにやや長い間、〈半分盲目〉という言葉がとても気に入っていた。預言者は常に自明なことに半ば盲目だった。（窓とメガネの社会の中で望遠鏡と顕微鏡は盲目とみなされる）」(II/310)。「私は、なぜ私が盲目の人をそんなに高く評価するのか、見つけ出すためにそんなに長い年月を必要とした。私が見ることをそんなに高く評価していたからだ。盲目性は見ることを高める」(VII/119)。

価値は語られることではなく、実行されることを求める。認識は行為へ移行しなければならない。その移行の橋渡しをするのが「空想」である。それをホールは次のように定義する。

「空想は、遠い（別の）状況を正しく想像する能力である」（XII/57）。「空想は最も強力な精神的な能力である。世界との精神の戦いの中で、この巨人の戦い、バルザックの戦いの中で勝利のための手段は、もしそれが空想でなければ、いったい何であろうか。－しかしすべてのもののために力が必要とされる。ここでその力の形式は何か。それは、その中で精神が勝利するだろう、精神的な正しさが可視的になるだろうそのような別の、未来の状況を絶えず、何度も、想像する能力である。とても明瞭に、とても激しく、そうしてこの想像が今の空気の希薄な空間を克服し、圧力の相違を廃棄するほどに、われわれに、持続し続けるために（われわれの理念の中で）、建て続けるために（というのは、建て続けることを止めることは、放棄することであろうから）一つの国 *LAND* を与えるほどに。しかし、眼に見えないものの中で建て続けること、非現実化 *Unrealisation* の中で建て続けることは途方もなく難しい。口でもってばかりではなく、精神でもって言うことができること、そしてそれゆえに絵を描き続けることができることは。－働き続けるための一つの国。というのは、われわれは一つの国を持たねばならない。／そのようにコロンブスは彼の航海に出ていった。彼は何も見なかった。空想だけが彼を大陸に導いた。想像された国を地上の国に導いた。／そしてさらに、空想の意義は他の人たちとの関係の形成のためにとっても大きい。／だから重要なのは、人が最も鋭く思いつきと空想を分けることである」（XII/81）。あるいは、「空想。彼は遠方に対して力を持っていた。それゆえしかしまだ、近さが不利なときには、彼は遠くの良きものによって自分を救うことができた」（VII/70）。

精神は力の用語法で語られた。ホールの断章は行動への命令となる。「空想は、一つの贅沢ではなく、人間の〈救済〉のために、生のために、最も重要な道具の一つである」（IX/20）。「空想が存在する保証を持つように、空想は、この行為へと導かねばならない、あるいはこの行為以上のものでなければならない。（もっと多くの行為を！）。これはすべての真の芸術における場合である」（XII/82）。

これまで、精神の内在的な側面を見てきた。「空想」は精神の世界への橋渡しの役割を持つ。そして精神は「結び付ける」。「血が結び付けるということは一つの狂気の考えである。結び付けるのは血ではなく、精神である」（XII/51）。「どの偉大な精神も常に一つの統合である、しかしその精神はそれを知らない、その精神は分析的なものを強調する。というのは、その精神は向こうに導くから、それゆえに必然的に統合的である。橋のように。しかし橋はそれを知らない、橋は〈そこへ！〉と言い、向こうに導く」（XII/128）。「証明するとはただ、一つのものをもっと多くのものたちと（正しい！）結合にもたらすことである」（II/179）。これは、ホールが書き上げられた「覚書」群を「結び付ける」ことに苦心したことを示している。彼はそれにおおよそ10年を費やした。そして同時に、私が本稿で試みていることも、

私による「結び付ける」ことである。それが同時に「解釈」となるように。

ホールは、理性、認識、知、空想などを統合する力とし精神を考えている。そしてその精神は行為する、世界に出ていく、そしてその都度の抵抗、摩擦の中で精神は試練を与えられ、鍛えられる。それは終わりのない活動である。「行動することが最高のものではなく、認識が最高のものであるので、行動することは正しいことである。というのは、それだけが中断されることのない認識を供給するから。／ものごとが正しい瞬間に、行動することから認識することへ、認識することから行動することへ移行することが救うのである。そして人が70年間賢明であったならば、彼は71年目も、そうであるために、賢明にならねばならない。健康は無である、しかし健康への努力は高い輝きを与える。すべての天分はただ、怠惰への意志を減少させることの中にある。／私は大抵の人間たちの改善できないことに慣れ始めている。それゆえに学ぶことは学ばれたことより以上のものである」(II/264)。

精神は行動する。世界の中に入っていく。しかし、「世界がほとんど精神によって、人間の活動によって変えられないことをわれわれは正確に知っている。しかし精神を通して起こる変化がどんなに小さいものであれ、われわれは、その中に生全体があること、その中にだけ価値があることを知っている」(II/122)。世界、「変えることのできない諸条件は、基礎である、それらの上のみ君は最高のことを為すことができ、為さねばならない」(VIII/25)。「良き精神と悪しき精神について。しかし別の種類の精神にとって事実こそはまさに幸福を形成する。彼らの理念をますます豊かに勢いよく伸びさせる栄養土である、永遠に父と母であり、彼らの理念を無数に拡張する。一方は現実のどの発展も恐れ、負かそうとし、他方はそれを歓迎し、すべての人に共同作業を要請する」(II/235)。精神は一人一人の人間によって担われる。「一つの並はずれた精神の強さは、同じカテゴリーの困窮に悩んでいる他者(…)の立場に自分を置くことに属している」(XII/18)。それは精神のコミュニケーションである。「人間は、彼にコミュニケーション能力があるに比例して生きている。(…)だから救済は、その根本において、人間とのコミュニケーションの中にある」(II/50)。コミュニケーションによって、「精神的な高さは私のものと君のもの間をもう区別できない。人は自分自身の出来事を世界の出来事と同一視する、世界の出来事を彼自身のそれと同一視する」(XII/98)。「君が変わるならば、世界も変わる」(II/137)。そしてその精神が現実の歴史・世界の中で活動するその軌跡が、「精神史」である。「唯一の - 人間の伝記」(XII/52)。私は「精神史」という「統一性」を『覚書』に読み取り、それを記述しているのである。

4 私という始まり

精神の歩みの始まりはどこにあるのだろうか。精神を受肉した存在が精神的労働者であるが、自分を「精神的労働者」と規定するのは「誰」か。ホールにおいては、それは「私」である。『覚書』がどのように始められたのかホールは言及していないが、小説を書きながら、彼はモンテニューがしたように本を読み、考えたことを記録した。30歳のころホールは人生と格闘しながら、いわば自分を鍛え、励ますようにしてこれらの言葉を書いた。その内面性が「私」である。始まりには「私」がいる。

それは記述した「個性」の概念と呼応している。ホールが本を読む場合、「私に外部から出会うものの中で、私の精神とある強い関係に立っていたものを際立たせることだけが重要であった」(IXの序文)。しかしそもそも、人は精神の活動をどう始めるのか。「ただどこかで始めることが重要である、始まりのところで始めることではない、いかなる始まりも存在しないのだから」(II/108)。始まりは小さな事柄でよい。「最高の知恵の中に回帰し、その知恵の主要部分を形成している契機」、それは「最小のもの、その意義の知である、眼に見えない始まりの知、見たところまったく価値のないものごとの知である。それらのものごとは合わさって一つの力を形成し、世界に対する力を獲得する」(II/246)。あるいは、「最初の行為は、(相対的に)盲目的であっても良い。後にその中で光が上昇する。最初の行為(それは相対的に盲目である)の中に見出された、光の火花はそれを通して光へと上昇する。それは見ることである、この見ることが一つのより大きな行為を産み出す …」(XII/17)。「人間の力の実現の場所は個々人のもとにある、万有のもとにはない」(II/174)。ホールは優れたアルピニストだった(ギムナジウム時に「登山日記」を書いている)。とりわけ精神の活動は登山の比喩で語られる。「認識は頂上である、しかしその道はどのようであろうか。アルピニストの平地の向こうにこの上なく素晴らしいものとして頂上がのぞいている、しかし彼の唯一の思案は道に向けられている。生の頂上まで登ろうとする者の道は何であるか。正しいことを為せ。／もっとも多く正しいことを含んでいる行為はどのようなものか。君が若いならば、多くが君に提供される。－だから、その中に君が正しいものを見る一つの行為をつかめ。その中における正しいことは大きくなる、そして君をもっと正しいものへ導く灯となる」(I/48)。ホールはそうのように始めたのだ。ホールには迷いはなかった。「私は、最も深い根底において、誰もが、彼ができることについて確信していると仮定している。－もっと正確に言えば、彼の最も内的な確信の中で、彼ができることについて一つの正確な知があると仮定している。この深い根底はとてつねにわづかの人の表面に押し寄せてくる。また人は自分自身に関してあらゆる種類のいたづらをする。バルザックにおいてはその根底

はほとぼり出てきた、そして彼は自分自身について真理を言った、「私は現在の社会全体を頭の中に持っている」 - 「私は天才になろうとしている」。ゲーテやヘッベルも自分を知っていた」(XII/129)。ホールの場合は、「しかし、ある人が作家であることの真の基準は、すべてにもかかわらず、ただこれである、人が自分自身の中に、表現するという打ち破ることのできない激しさを持っていること」(IX/61)。

しかし「私」の内面的な決定が社会と一致することはない。ホールはギムナジウムを放校された。「おおよそ私の 17 歳の時、それでもって私が当時既にとくに学校やあらゆる教師に対して用意していた、重い鎧の装備のゆえに。私は一度もその鎧の装備を脱ぐことはできなかった。そのような鎧の装備が外から調達され、単にあてがわれたのではなく、自分の実体によって形成されているときに一そう脱ぐことができなかった」(II/260)。ホールは自分を排除する社会を所与の条件として認めるが、批判を止めることはない。そこから『覚書』全体の強い論争的な調子が出て来る。それは力のメタファーで語られる。「考えることはとりわけ勇氣である。 - 18 歳で（おおよそ）私は考えることの中で一つの強い始まりをした。それから中断の年が来た、とりわけ私がただ、ひよっとしたら別の人たちは彼らの説、彼らの確信でもって正しいことがありうるのではないかと考えたから。私には、他の人たちの確信を無視する大胆さが欠けていた。しかしそれだけが考えるということである。／確信を伴ってではなく、他の人たちの確信に反対してでもなく書くこと、それらを完全に無視すること、たとえそれらが千回も強調されても - そしてそれでも書くこと。／私は、他の人たちの発言、証言を無視すると言ったのではない、そうではなく確信を。／数年の中断の後で、一つの主として神秘的な思考が来た。その神秘的な思考はとりわけ、人格を強固にする目的を持っていた。それから再び一種の間隔が続いた。その間隔の中でゆっくりと思考が上昇してきた。その思考は持続の保証を自分の中に持っていた。それは 1934 年に初めて一つの完全な高さに達した。それは神秘的な思考ではなく、*世界*を考えることであった。多方面にわたる思考、ますます大きくなる対象の総計を捕える思考。ますます多くを要求する思考、ダイナミックな、世界と一緒に進んでいく思考、学ぶことを要求する思考、無限に *ad infinitum* 考えること - 要するに、現実的な、持続する思考」(VII/166)。

ホールは、自分を排除する世界はいったい何であるかと考え始める。ホールの思索はホール個人の「私」の存在からしか考えられない。「一つの素晴らしい表現、〈私は私のもとにいる〉(“être chez soi” 〈自分の家にいる〉)」(VII/64)。「独立的になること。国家や家族に完全に何も求めないこと（社会的な証明、地位）、そしてそれ以上であるもの、そもそも人間たちの意見に何も求めないこと、そして最も困難なことであるが、ときどきはまた一番近い人の意見にも。／私は在る *Ich Bin* と生の語りは言う。〈私はなる *Ich werde*〉と話す生はない。

〈私はいつも居合わせていない - いつもただ突進し続ける - 存在しているもののそばを過ぎて - ある外的な目的の方へ〉。もっと実践的に、〈具体的に〉語ること。世界(国家、家族、他の人たちの意見)は、私が一つの良い考えをよく書きあげるか、話すか、あるいはただ考えているのかどうか、私に問わない、そうではなく、私が聖別された形の文書(小説、ノヴェレ)を分厚く呈示可能にしたかを問うのである。〈出して見せる〉と彼らは言う。最高のもを人は出して見せることはできない」(VII/143)。

「固有性」は、「私」を補う概念である。「〈私を誰も打ち負かすことはできない〉。そのようにある人は話すことができた。彼は付け加えた、〈人は私に苦痛だけを加えることができる〉。それはどういうことか。どの肯定的な力も打ち負かされない。〈肯定的な力〉とはどういうものか、力は常に肯定的ではないか。／どの力も肯定的である。君がしかし多くの個別の力から成っているならば、すなわちすべて他のところに属している力、君が属していない力から成っているならば、君は肯定的ではない(…)。肯定的な力ではない。君は、不幸な出来事の中で力に同行する忠実さを持たないだろう。力は君のものではないので。それらの力はただ苦悩している。君はしかし、君自身をそれらの力から離したので、すべてのものを欠いている。君は死につつある。／そのように〈肯定的な力〉は正確に見て、〈固有の力〉である。君が自分がそうであると称しているものごと(力)ではなく、それと君が同一であるところのものごとである。というのは、人はおそらく自分はものごとであると称することができるのだが、ものごとはまた力である」(XI/39)。「君が肯定的に - 自分の生ではなく - 生きることができないところで、君はすでに否定的に生きている、他の人たちの生を生きている。私によって使用された言葉、私の言葉ではないその言葉が、すでに剽窃であるように。〈私の言葉〉、それは私によって責任を負われたという意味である」(I/8)。「私」が考えることを、「私固有の力で」「私の言葉で」表現する。それがホルの『覚書』である。そうして「君が現にあるところのものすべてに、君はいつかなるだろう」(XII/152)。

ギムナジウム時代の『青春日記』⁹⁾にはバルザックのような天才志向、強烈な自我の観念が見られるが、『覚書』の中で「自我」は所与の条件としての客観世界との関係に中にある。「自由は、人が必然的なものに同意しているところにある。天才とは、ちょうど必然的になったものを、必然的として認識する存在である。天才から善の概念は導き出されている。天才が果たすものは善である。認識は、前代未聞に異質なものを自然なものの中に運び込む」(II/139)。「私」が問題になれば、同様に「他者」が姿を現す。「生は決して〈私はなる〉と言わない、そうではなく私は在る ICH BIN と言う。／その時、労働者は、みすぼらしく死んで

⁹⁾ Vgl. Hohl, Ludwig: Jugendtagebuch. 1. Auflage, Frankfurt am Main (Suhrlamp) 1998.

いく者は？。あるいはむしろ労働者たちは？。彼らもまた存在している。そしてまさに、彼らが現実的に在るものの、彼らの意識が目覚めさせられなければならない。そして彼らもまた言うだろう、〈私は在る、そして私が在るので、君もまた在るべきだ〉、つまり一つの変えられた条件」(II/64)。「作品を受け取る人たちは他者たち」である(II/146)。「人はさらにまた他の人々を考える必要はない。良き(正しい)思考は自動的に他の人々へ導く。人は自分の中にも、他者たちの中にも生きていない、そうではなく彼の生産の中に生きている。人が一度でも自分を見ることができれば、人はまた他の人々を見る」(II/269)。

「そして最後に私は今なお一つのことを信じている。世界を。世界はすべての人格の中で最も偉大なものである」(I/38)¹⁰⁾。

5 実践

ホールにとって生きることは、世界の中における精神の労働である。「人間の価値、つまり人間が価値を欲するということが。価値を欲することは、働くことと同一である。(…)労働は運動である、しかしわれわれの運動である。回転している、現実的な水車の輪は、働いている。というのは、回転することは彼の運動であり、彼の完全な可能性であるから」(I/3)。「〈人間は豊かであるという義務を持っている〉という言葉に。時間を悪しく過ごすことは、不器用者の事柄である。もっと高いところに立っている人にとっては各々のどの時も完全に過ごすことが問題となっている。 - 各々の時間の種類の中で完全に」(II/144)。

ホールは、生の意味は何かと問わない。その問いは意味が与えられていることを前提としている。そうではなく、精神は、人間が生の意味を作り出すと考える。自分の生から価値を産み出せない人の生は価値がない。そして、価値を産み出そうとする人にとって「生は短い」。「人間はただ短い時間だけ生きる。われわれが時期を逃さずにわれわれの人生の長さについて知るならば、すべてはとても変えられたものとなるだろう。／人生のリアルな持続時間はどちらだろうか。それは、君がどれほど頻繁に、どれほど以前から君の生を短いと考えているかによる。／われわれが行動することはすべて、それが価値を持つとすれば、われわれの人生の長さの観点から行動されなければならない。／そしてそのような行為 - 外的な力ではなく、内的な力が君を強いる固有の行為 - それは生を与える唯一のもの、救うことができる唯一のものである。／そのような行為を私は働くことと名づける。／正しい道は、

¹⁰⁾ カフカは言う、「お前と世界との決闘に際しては、世界に介添えせよ」(フランツ・カフカ(吉田仙太郎訳): 夢・アフォリズム・詩。(平凡社)1996, 170 p.)。「私」性に最高の価値を与えることは、「世界」を同様に評価することと同義である。

われわれに可能である完全な活動の展開である。もっとも完全な活動の。つまりわれわれの能力（われわれの諸条件）に関して、そして他の人たち（われわれと同様に他の人たち）への作用に関して測定されたもっとも完全な活動の道」(I/1)¹¹⁾。

ホールが言うのは単純なことだ。「君の個別のものごとをなせ」。「ゆっくりと、君の可能性の、君の力の尺度に従って、一つ一つ。君の生は変えられている。／彼、歴史の英雄が跳躍をしようとするのではない、多くの瞬間 - 彼が並べた個別の実行 - が彼をそこに運んだ。彼はこの瞬間に、先行している堅実な実行の何かある瞬間における以上にすべきことを持っていなかった。(それは私が別の個所で言ったことと一致する。つまり、倫理学を書くことは、スピノザにとっては、スピノザがいたところでは、容易だった)。／強大な革命家の一人が決定的な瞬間に見出したと言われている言葉を思い出すならば、つまり〈ここに私は立っている、私はそれとは異なったことをできない〉。／おお親愛なる友、人間よ、生はしかしそんなに困難ではない」(I/20)。ランボーなら言うだろう、「弱かろうが、強かろうが、とにかくおまえはそこにいる、それが力なのだ」¹²⁾。

ホールを理解するときに困るのは、彼が言うことはあまりに通俗的に聞こえることだ。彼が歴史との遺産として受ける価値は、世俗的に言い古された事柄である。彼はそこにこびりついた汚れを削り取り、原初の輝きを再興しようとしている。それは言語表現の仕事である。

¹¹⁾ 「労働は常に一つの内的なものである、そして労働は常に一つの外部に向けられていなければならない。外部に向けられていない活動は、労働ではない。内的な出来事でない活動は、労働ではない」。「一つの行為の内的なものを決定しているものについて、行為の完全な必然性」(『ニュアンスと細部』II/11)。

前述の「個性」の概念が「労働」(精神の働き)に適応されると次のようになる。「人間の働くこと、世界を変える作用は三つの段階で遂行される。それらは、1 大きな理念。2 (その大きな理念に適合する) 個別観念。別の言い方をすれば、大きな理念の応用、それらのもっと小さな理念、個別的なものの理念への解消。3 (個別観念に適合する) 個別実行。／大抵の人間たちはこの三つの段階の第一にとどまったままである。大きな理念のもとに、あるいはそれに向かい合って一種の展望点の上にとどまっている」(I/18)。建築の比喩で語ると、「一つの並はずれた建物の建築の中に大きな行為を調べてみよう。／君は一つの建物の素晴らしい理念を持っている。君はその大きな理念を個別理念に移し替える。その段階はそのようだ、壁はそのようだ、屋根は、敷居はそのようだ。／その時、君は実行する、敷居、壁、ドア、すべてを、個別性があらかじめ描いたように。それは第三の段階である。この実行は、純粋に小さな行為たち、無数の、骨の折れる、通常行為の中に本質を持っている」(I/19)。

「大きな理念」についてホールはフロイトを例として語る。「大きな理念と良き考え フロイト。それに対して人がフロイトと意見が一致なくても、それはしかし、彼が一つの大きな理念を持った男であるので、いつもただ彼によって表現されたものただ一部に触れるだけである。つまり一つの良き理念は第一に、遠くまで輝く松明である、それは照らし出す、その場所に反対の領域でさえ照らし出す。／彼はそれをもう必要としていない。人は彼から逃れられない。たとえ人が彼にとってもっとも敵対的な人間であり、彼の前で山のもっとも辺鄙な峡谷の中に隠れるにしても - 天からの、あの光の反射はいつか中にまで点火するだろう」(II/73)。「永遠の強さとは、人間が徐々にすべて(すでに起こってしまった、計り知れないこと、火の獲得から精神分析まで)に、潜在のすべての妨害を通して、到達したということだ」(II/224)。フロイトは『夢判断』を書いたとき、それが社会でどんなに否定されようとも、精神分析の理念(無意識の発見)について揺るぎない確信を持ったに違いない。しかしフロイトの場合も、数知れぬ「個別実行」(臨床、観察、考察など)がその大きな理念を築き上げたのである。

¹²⁾ ランボー(宇佐美育訳): 地獄の季節。ランボー全詩集。(ちくま文庫) 2003年。

私が引用を多用するのは、その表現の作業は価値の力を取り戻すことと同義であるので、その表現の「ニュアンスと細部」を具体的に見るためである。「大きな理念、個別理念、個別実行」の考えは、「私が紙の上に書いたのではなく、石を打って刻んだであろう文である」(I/24)。

ホールは万人に説教しているのではない。そうではなく自分に、あるいはどこかにいるに違いない精神的労働者に語っている。ホールが語るのは、労働の個々の歩みである。「アキレスとあの昔の戦士たちの鎧が輝いている。－それは何百年を通して輝いている。近くではそれは埃と汗で暗くなっている。／どの個別な一歩も、一つの抵抗を壊すことである。どの壊すことも苦痛を作る」(I/25)。個別実行をホールは登山の比喻で語る。「高山から。私は、いかなる高山の登攀においても、喜びを持ってその一歩をしたことがない、と言う。個々の一歩は全く単純に厭なものである。同様に私は、例えば書く際に私をそこに座らせること、(私を再び座らせること!)、筆をつかむこと、要するに個別なことが厭ではなかつたろうということ思い出さない。／人が希望することのできる唯一のことは、個々の歩みが全体によってとても完全に保たれていて、それらが無意識のように起こることである。／そして高山登攀の個々の歩みがなぜ、全体のことに対立して厭になるのか、それについては私にはいかなる疑問もない。全体は新しい、歩みは古い。－ただ新しいこと、変化させるもの、生産的なものだけが人間を喜ばせるのである。ただ生だけが生を喜ばせる。(死は生を喜ばせない)－一つの新しい全体をわれわれは一部分は古い建築石でもって、この場合、歩みでもって作る」(I/26)。

あるいは「道」のメタファー。「世界は道路から成っているが、その道路のごくわずかなだけが通行されたばかりである。君の周囲のすべての掴むことのできない空間は、君がそのようなものとして認識することができない道路から成っている。人間は道路を建設する必要がない。／一つの道路を認識する勇気を持つこと、それが業績である」(I/36)。「一つの精神的な場の力は、とりわけそこに導く道の長さから成長する。／最大の抵抗の男、それからしかし後の時間に最大の決心をすることができる男、この男は、その時、集められた認識のゆえに(彼が自分の中で克服した抵抗によって)おおよそ無敵である」(II/131)。

精神は抵抗をいわば必要としているので、疲労、停滞は必然的に現れる。ホールはそのようなとき、「休息すること、何も考えないように努力すること」をした。「それはいつも、私がハリネズミの森と名づけた、その都市の森の中で起こった。しかし今日、私は月の森へ行った。－決定的な体験だった。見通すことのできない結果を持った内的な体験。とっくに準備されていた認識が結晶化し、完全な明晰さになった。私は、今度は、すべての似たような場合に起こったことを探求した、私は熟考した。それは、精神を、家に残したままにして

置いた対象とは全く別の対象に向けることであった、一つの別の活動だった。そして家に残されている仕事に再び向かう、新しい能力。そして、／この認識はしかし、われわれが、休息によってではなく、生産することによって、成長するということであった。(あるいは休息ではなく、生産が強くなる)。／休息は殺す。眠りとは何か。それは例えば、それによって精神が元気を回復する、精神の休息であるか。違う、それではなく、別の、もっと強いものでさえある生産に向かうことである。この新しい活動によって精神に新しい源泉が開かれ、それから精神は(目覚めるとき)人が言うように、〈休養して〉、そしてそれはだから、実際にはまさに、休息によってではなく、一つの別の激しい活動によって元気を回復して、以前の活動に戻ることができるのだ。予期せぬ方向から精神は新しい力を持つてくる。休息は存在しない。休息はただ死である。／(…)木も、動物も、人間も精神も、休息の中に生きることにはできない、生は決してある高さの上で耐えていること、不動のままとどまることはできない、生は常にただ生産であり、上昇である。そしてそれからいつか死が来るのだ。／自然は、古人が教えたように、休息と運動に従事しているのではなく、そうではなくただ運動に従事しているのである」(VII/20「月の森とハリネズミの森」)。「人は働くことを止めてはならない。潜在的な期間のあいだ持続的な練習を続けてこなかった者は、変化した条件の中に自分を見出すのに時間を必要とする」(I/12)。準備は麻痺させる。「人は待つてはならないということ、つまり、どの活動も一つの完全な活動でなければならない、準備であってはならず、その瞬間を満たし、自分自身の中にとどまっていなければならないということ」(XII/80)。

労働が順調に進めば、それには何も言うことはない。しかし精神は容易な課題に向かわないので、いわば不可避な苦難に対する方法をホールは模索する。その模索自体が、『覚書』の内容となるのだ。「方法。ものごとの中に自分を入れること。泳ぐことをわれわれにとってその一つのイメージにしよう！。急激な動きもぶつかることもなく行動すること。怒って周囲を殴ること、特に陸の近くでのそれは何の役にも立たない。すぐに始めるのがベターである、たとえゆっくりであっても。要素が運ぶ、それが主要なことである。良き泳ぎ手を作るのは、力ではない、そうではなく要素への信頼である、すでに身体的になった信頼である。(もっとも信頼に満ちて要素の中に身を置くことのできる人は、最良の泳ぎ手である。わずかの力で魚は矢のように突進する)」(I/10)。

さらに「事柄 Sache」の方法。「勝利のテクニク。勝利の最善のテクニクは、勝利のテクニクを持たないこと、一つの事柄を、専念してこの事柄に奉仕するテクニクを持つことにある。／勝利のために戦っているすべての人たちに、遅かれ早かれ一度は疲れが襲う。この瞬間から利点は決定的に、事柄のために戦っている他の人たちの側に向かう。なぜなら

ば彼ら自身が疲れていようが、いまいが、事柄は倦むことなく存続するからである。一方、ただ約束されていた目標であった勝利は人々の力と気持ちに依存している」(II/284)。ホールにとってその「事柄」は思索を言語によって表現することである。その事柄があったからこそ、ホールは貧困や苦境を乗り越えることができたのである¹³⁾。

「そして最初の試みが次の地帯での困難と危険化をもたらしたならば、それはすべての新しい事柄の宿命である」(VII/144)。だから困難は恐れる必要はない。「もし私がとても勤勉であるならば、私にとって何も危険ではない」(I/5)。勤勉、努力、忍耐、ホールの述べる価値は昔から言われてきたものだ。それを彼は精神の「遺産」と考え、「相続する」。自分の言葉で述べる。「忍耐。世界はわれわれを長い時期を通じて試験する、1点1点。それゆえにゲーテは、最高のこと、あるいは最高の事柄の一つは忍耐であると述べたのだ。一本のまったく長い線の中でわれわれの最良のものの応用。そのような応用によって人は世界に引けを取らない！。ジッドにおいて人はこの忍耐の最高評価を見出す。(1922年、〈私は、もっとも美しい才能よりも一つの頑固な忍耐をよりおおく賞賛していないのかどうか知らない〉)。／そのような〈忍耐〉が何であるかを私は、もちろん20歳では理解しなかつただろう、ほとんど予感もしなかつただろう。私はまた、ほんのわずかな若者だけがそれを理解することができると思う。ゲーテは言う、〈信仰、愛、希望はかつて静かな打ち解けた時間にそれらの自然の中に一つの具象的な衝動を感じた。それらは一緒に励み、一つの愛らしい形成物、より高い意味におけるパンドラを、忍耐を創造した〉」(V/24)。「ゲーテの忠告は、強い意志でこらえて決断せよ」(II/102)。

努力について。「努力の秘密。私の力はますますわきにそれて出て行く、私は私の力をいつも計画に即したものの外に持つ。外部に。常に別の場所に。ただ、それを可能な限り生産的に待ちかまえて捕まえることを許す状況を、形式、基盤を持つことは困難である。しかし大きな労働、努力はすべてを克服する。それがまさに、その努力の秘密なのである、その努力がまったく計算されないことを引き起こすことが。誰もそれがどこへ導くのか前もって知らないということ、それが、誰も考えていない場所に実りをもたらすということが」(VII/145)。「人間が、彼らがいいつも努力していると称している、その四分の一ほど努力しているならば、世界はどんなに他のようであるだろうか。／それを私は見た。人々は努力しない、むしろ彼らは努力しないように努力している。彼らは何かの仕方疲れている」(VIII/5)。登山の比喩によって。「〈絶えず努め励むものを …〉。／あの最初の人間の努力の神秘的な

¹³⁾ 「リヒテンベルクは正しい、困難さは、実際には、ものごとにとって異質な概念である。〈困難さという言葉は、精神の一人の人間にとって、実在するものとして考えられてはならない。それを止めよ〉。
- 精神の人間はまさにものごとのもとにいるのである」(XII/107)。

本質について。その努力は、青春が思うようなまっすぐな道ではない。その実り（道の目的地）は見つけられない。到達することが問題となっている頂上をわれわれは見るのではなく、われわれを道に誘うべく掲げられた旗を見る、せいぜいのところ、何の意味もない一つの頂上の前の峯を見るだけだ。－ その時、途上にわれわれは宝石を見出す － あるいはわれわれはますます真なる頂上を見る。つまりわれわれの本来の目的地はその道である。／もっとも偉大な人々はもっとも偉大な、道に精通した人である」（II/36）。

ホールはこれらの「価値」を「私」のため、いや精神自体のための方法として述べている。いかに精神活動を促進するかが問題なのであって、共同体のためとか、人々のためではない。しかし精神は生身の人間の中に宿る、精神の媒体は人間であるので、その「精神的労働者」のために方法が考えられているのである。だからホールの場合、哲学のような認識のモデルを作るのではなく、認識者（精神的労働者）の生のテクニク、心構えが問題となる。例えば、勇気。「思考は一つの勇気である、それから一つの不遜である。／問題は、思考が論理的であるかどうかではない、そうではなく、思考がその場所にいるかどうかである」（II/236）。

勇気とは孤立を恐れないことである。「台座。 どの偉大な芸術家もこの二つを探している、つまり自分を孤立させること（孤立できること）と食料を供給することの同型性である。真の芸術は常に最大量である」（II/275）。「書かれなければならないだろう、ぞっとするような不快さの手紙、生を（外的な生活）を可能にするものであり、私が数え上げる必要がない、他の似たような企て。世俗的な性格のすべてのこれらの用事を私はいつも押しのける。私が例えば一つの作品の一部を為すことができるとき。〈君は最初にこの要件をするべきではないのか、... 後でもっと良く芸術に専念できるように〉。なぜ人は、後に〈邪魔されずに〉芸術に向かうために、この不快なことを最初に片づけることができないのか。この不快なものからはヒュドラのように頭が次から次と生えてくるからだ。世界を卓越して排除することができない人は、芸術の能力がない。／芸術は現実的に第一の、唯一最高の命令者であろうと欲する、（ただ生理学的な限界を除外して。この限界はまさに命令者ではなく、限界である、人は、それを明瞭にするために、死のことを考えよ）。芸術はいかなる他の条件のもとでも君と結び付きをしない。そうではなく芸術が働きかけることができる場所で、君はそれに作用する空間を提供しなければならない。最初の瞬間に、どの瞬間にでも。饗宴に行く途中で一時間ある個所に立ち止まるソクラテスのイメージは、すべての芸術家にとってもイメージである」（XII/121）。「創造的なものへの接近の秘密は、(...) 閉じこもることができるということである」（II/258）。

ホールはこれを 30 代に書いている。彼の事柄は文学であるが、同時に文学に取り組むこ

とについて思考し、反省している。ホールはいわばその事柄を巡り自分と対話し、それを記録する。だからホールの文の見出しは多くが、動詞の不定詞、自分に宛てられた要請、命令である。パスカルの『パンセ』、リヒテンベルクの『控え帖 *Sudelbücher*』も同様に日記として始まった。ホールは「手紙」の比喻を用いるが、その第一の宛先は自分である。それを常に念頭に置かないと、ホールの主張は通俗的な教訓になりかねない。ホールが『覚書』はアフォリズムではないと言うのはそのためである。ホールはいわば自分を精神のオルガノン(道具)にしようとしているが、それは日常のどの瞬間にでも課せられる要請である。

6 日常における精神

「自分に規律を教えることのできない人間は決して精神的な業績にまで至らない。彼の固有な業績を可能にする諸力の規律化」(II/194)。精神活動を最も促進する日常・環境はどういうものだろうか。「人間は誰も同時に幾つかの場所で働くことはできない。反発するためには人はある抵抗する地面を持たねばならない。われわれの運動の一つが、変化させるもの、創造的 - それが労働というものである - であるならば、われわれの日常の他の運動は機械的に起こらねばならない、それらが労働を可能にする基礎を形成するように。われわれがわれわれの力を統一させ、一つの個所に導くことが、重要である。そのことはまさに、われわれの通常の日常的な処理が機械的に起こることを意味している。(カント、セザンヌ)。花火はすべての方向にシューと音を立てて飛ぶ、大砲は明確で、静かである」(I/17)。「私が自分のために定めた二つの格言。例外なく、いかなる結果も午前中に到達されなくても、朝早く起きることを維持すること。強い強調を持って身体運動を維持すること。／両者は、私の状態にいる一人の人間を脅かす、主要な危険に向けられている。弛緩することである。偉大な才能は偉大な意志なしには存在しない」(VII/141)。

ホールの文体と生のスタイルからは、地下室に住んだことが示すように、夜が連想されるのだが、彼は朝(陽光)の人間である。ドイツロマン派の夜ではなく、ヴァレリーの地中海の光が志向される。「夜の静けさは理念を促進する、しかし少なくとも私においては、それは朝か午前中のそのような確実な理念ではない、疑いを引き起こす理念である、そして人はそれらに対してはるかに注意深くあらねばならない」(VII/154)。「酒宴の歌 - 夜と昼の正しい混合を達成することは、単純ではない。(- 完全な昼は形成を許さない、完全な夜はすべてを消してしまう)」(VII/27)。

精神は物質的に多くを求めない。「外的な生活条件。精神的な労働者は外的な諸条件の平等を望むだろうか。彼は彼の要求において、彼が必要とするもの、他者が必要とするものに

よって規定されるだろう。もし彼が生きそして生産することができるならば、ある人がヨットを所有していて、ケーニヒ湖のほとりに城を建てさせても、それは彼にとってどうでもいいことだ。逆にしかし、彼が、一人の労働者がそれでもってひょっとしたら生きることができるであろうものでもって生きることも生産することもできないならば、彼はもっと多くを要求するだろう」(II/155)。

精神と外見。「時おり人は奇異の念とともに、一人の素晴らしい、精神化された、世俗的でない人物に、一つの粗野な、武骨な、世俗的な側面を知覚した、その側面はすこしも全体のそんなにも繊細な形成物の建築に相応していなかった。そして人は、まさにこの武骨な、世俗的なものこそ、その人物全体を維持しているものであることを見逃したのだ。／極端なもの、一つの純粹に精神的な体験が単独で持続を持つということは不可能である。だから一人の人間がその極端なものもにいるならば、彼は持続を持たない。それは最も明瞭にランボーに見られる」(II/322)。身体の外見も精神とは関係がない。「*身体的障害*。私が猫背、びっこ、小人などであるにしても、それは私にはそんなに意味を持たないだろう。それは一つの所有物を少なく持っていることを意味するだろう。人はこの基礎において適応するだろう。盲目であることでさえ。しかし一つのことを私は我慢しなかっただろう、私が1メートル80以上だろうことである」(VII/120)。

天候と精神。「美しい天候はなるほど君を高い業績に導くだろう。天候がであって、君がではない。－しかしただ、君がどの天候においても君の力を投入した後で」(II/219)。「最も美しい天候、それは雷雨」(VII/63)。

亡命。1922年、20歳の時にホールはパリに行った。1937年にスイスに帰国後、ジュネーヴに住み、ドイツ語圏スイスにはほとんど行かなかった。精神の意味で彼は常に亡命していた。「ある王国のもっと偉大な人たちは常に他のところから来た人たちだ。バルザックの『Z.マルカス』。人は最大の力を、その起源の領域から向きを変えることによって獲得する－亡命によって」(II/27)。亡命は旅ではない。「最大の精神力のためにいかなる旅も必要ではない。(カント、プルート、ソクラテス)」(XII/29)。精神の故郷について、「人間たちが、彼らがただ一つの故郷を持っていることを理解するならば。それは労働である、しかし良き労働、真の労働である」(II/199)。

精神の活動において常に、個々の一步一步が問題となる。そしてそれは辛く、困難な、しかも単調な歩みであるので、常に忘れられる。ホールはだから何度もそれを想起させる。「問題は、人が健康であるか、病気であるかではない、そうではなく、人が彼の健康あるいは病気でもってどのように、何をするのかということである」(II/4)。「どの活動も正当なものでなければならぬ。それは厳密な法則である。そしてその活動がそうではないということの

中に、大きな、唯一本物の不幸がある」(VII/22)。

ホールは精神の活動をシシュフォスの神話で語る。「どの程度いったい強制的に一つの正当な活動が実現不可能にされることができるのか、だから外的な状況によって実現不可能にされることができるのかという問いに対して、人はいったい何を答えるべきだろうか／(…)君は妨げられている。よろしい。それは君に意識される、君の怒りが目覚め、君はそれに対して戦う(妨害に対して)。君はもはや妨げられていない。正当な活動を妨げる状況に対する君の戦いはすでに一つの正当な活動である。／というのは、精神は以下のこと以外の何であろうか。常に何か別のもの、精神の活動方向を持続的に変えること以外の何であろうか。言葉で言い表せないものに従って、生を高める目的のために。デープリーンの一つの比喩。それは、私が精神について、戦いについて、真の活動(個々人の、人類の)について語ろうと試みるとき、何度でも思い浮かぶのである。／デープリーンはあの石を転がすこと、それが何度でも転がり落ちるその同じ山の上に何度でも石を転がして上げることで喩える。その男はその石を何度でも転がして上に運ばねばならなかった、それが彼の生であった、そしてそれは生である。その比喩はしかし、最大の高さから見られている。その石は生である、精神的な生である。〈永遠の生〉。維持することが重要である生。その石は例えば外的な結果を意味していない。外的なものは達成される。すべての外的なものは変化する。われわれが欲すること、もっとも考えられないことを人間は時とともにすることができる。人間の自然、計画や思考を人はまたとても変えるだろう、人は彼の能力と知を途方もなく変えるだろう／ただ一つのことを人は決して変えることはできないだろう、と私は思う、人は、人間が休息することができるということに到達することは決してないだろう」(VII/23)。

これまでのことは、精神労働者に向けて語られている。しかし世界はおおむね精神労働をしない「怠惰な」他者たちの集まりである。その怠惰は個人的な欠点ではなく、近代市民社会の現象である。物質的生産の効率化が図られ、一方で精神の価値はほとんど考慮されない。その中で精神の活動はシシュフォスの不条理な姿を帯びるのである。精神はだから、精神の活動を否定する現象を批判し、戦う。「ただ一つの不幸が存在する、人が何もすることを持っていないこと、あるいは誤ったことをするように強いられることである。行使している人の能力を高めないどの活動も誤りである」(II/52)。精神の活動の不在は不幸である。「無活動の人間は怒るか、病気にならなければならない」(I/34)。

精神の働きは、非精神的な現象においてもっとも際立って現れる。作家のアドルフ・ムッシュグは言う、「ホールの文は牢獄を爆破することができる。しかしその牢獄が愛しい習慣、苦勞して組み立てられた人格であるならば、彼の文はまた痛みを作る」¹⁴⁾。ホールは精神の活動

¹⁴⁾ Mushug, Adolf: Ludwig Hohl. Schreiben als Forschung. In: Ludwig Hohl. Frankfurt am Main

を阻害する様相を批判するが、それは同時に、近代市民社会のモラル批判となる。そしてモラルの批判のためにアフォリズムの形式は伝統として用いられてきた（フランスのモラリスト／人性観察家、カール・クラウス）。ホールは、市民階級の俗物として「マイアー氏」（あるいは「薬剤師」）の人物を造形した。マイアー氏、「彼は自分の下に堅固な地面を持っていると断言する男」（I/14）である¹⁵⁾。

怠惰はプロテスタンティズムの道徳からしても悪徳であるが、ホールの述べるのは精神の怠惰である。「われわれの認識はそんなに後からのものであるのですべての苦悩が生まれる。怠惰は唯一の原-悪である。われわれのすべての悪の種である」（11/23）。「人間たちはただ恐ろしく怠惰なのである。そこで彼らは一分間考えるよりもむしろ、一時間祈りに行く、彼らはそんなに怠惰なのだ」（II/128）。「ペシミストとは何か。悪しき人間である」（II/84）。ペシミストは悲観を無活動の口実にするからだ。

退屈。「喜びについて。私がここで知っているすべての人々は、何と途方もなく退屈なのであろうか。すべての人間に与えられているように、彼らに与えられているわずかの時間を。なぜ彼らにとって心配は高さへの一つの段階にならないのか。私は私の人生の中で一つのことをきっと学んだ、それを私は生まれてきたとき知らなかった、つまり、人間は途方もなく退屈であるということ。私は、人間たちがそんなに愚鈍なので、ただそれだけで、世界から逃亡する人を想像できるだろう」（XII/104）。「一人の人間を見て私に浮かんでくる、最も頻繁な考え、〈どのようにそれは生きるのか〉」（VIII/11）¹⁶⁾。

非精神の批判は「神」の批判においてもっとも鮮明になる。ホールの父は牧師なので、それは「父」の支配への抵抗としても読める。ホールにとって神は、人間の精神の弱さ（怠惰）が作り出すイドラである。「神について。人は、人類に成功した素晴らしい発明について語るならば、この発明を大抵忘れた、神を」（II/113）。「神はとりわけ人間の行動しないことの一つの産物である。／受動性の中で人は意志、行動と自由裁量を一つの大胆な理念として万有のどこかに分裂させる。行動し、操縦し、自由に裁量する一つのものが存在することができるように。一つの輝かしくも大胆なイメージが。憧れがそれを作り出し、保つ。〈神は操縦する〉は、人間自身が、人間にとって操縦可能であろうものを操縦しないことから由来している。人間は、自分の尊厳を守るために、この小さな文を形成し、言う。／彼らが生涯にわたり否定しているすべてのものは、それから最後に、丸太のように太く〈神〉という観

(suhkamp taschenbuch materialien. st 2007) 1981, S.132.

¹⁵⁾ 「マイアー氏」、「薬剤師」については「表現」のところで論争のレトリックとして論じる。

¹⁶⁾ ホールはこれらを市民社会の現象として批判している。精神のエリートのうぬぼれからではない。「現実的に活動している人はうぬぼれることはできない。うぬぼれは、活動が十分でないとき、誤りを示し始めているとき、はじめて現れる」（I/31）。「真の活動は傲慢から自分を守る」（II/267）。

念につながりあわされる。そしてその観念の上に丸太がざわざわと音を立てて降りてくる」(XII/132)。ホールの「神」批判はどれも、表現が面白い。「一つの神の家を通りすぎながら。そこに彼らはそれを置いた。一つの巨大な石の建物。 - - のための。無のための。ただこれを理解した人、つまりそのすべての豪華さとより高い真剣さの印を持ったその巨大な石の建物が、存在していないものためにそこに立っているということを理解した人は、最大の世界変革のために成熟している」(II/166)。「神は存在しないことは私にとって完全に明らかである。しかし世界は存在する、それはすでに十分に驚くべきことである」(XII/35)。「私が一人の神について聞いた最も賢明なことは、彼が人間の姿に変装して歩きまわるとのことだ」(XII/63)。「神の友、世界の敵！」(XII/90)。

ホールは制度としての教会を批判するが、信仰（精神の一つの活動として）を否定しているわけではない。「信仰と知。信仰と完全な知の主観的な価値は、正確に同じである。相違はただ、外部世界への関係の中に示される。完全な知とは、可視的な道的手段で一つの個所に達したということである。だから他のものごとが続き、自分をそちらの方へ導くことができる。人はそれらに道を示すことができる。信じるとは、夜の道で同じ個所に達したということである。人はだから他のものごとをそちらの方に指示することはできない、叫び、身振りと約束（だからここにあるものごととは別のものごと）によるのでなければ。そしてそれは、すでにとても近くにあるそのようなものごとだけに作用するのである」(II/292)。

ニーチェは神を大仰な身振りで否定した（「アンチキリスト」、「神は死んだ」）。ホールは「神」を持たずにはいられない人間の弱さを批判する。「神という要件において奇妙なことは、神の存在を真剣に肯定する人たち、それを真剣に否定する人たちが、互いにとても良く理解し合うということである」(XII/62)。「これらの夕べの中の一つにおいて、祈っている子供と明る窓。〈私がそこで無駄に使われるエネルギーの半分を自由に使えるならば〉。／もし人間たちが、15分間祈る代わりに、5分でも自分自身について良く考えるために使用すれば、それはどうであろうか。ゆっくりとますます多く、練習する、自分をそして他の人たちを見る練習をすれば？」(VII/51)。

神は存在しないが、教会はあり、聖職者もいる。「世界は素早く腐る、そして君が君の中で休むことなく産出しなければ、君は貧しい。もう一度。ずっと以前から救われていた人たちだけは信用するな」(II/116)。

道徳。「道徳は人間を彼の義務から解放するためにある。／以前、彼はすべての彼の歩みの責任を負わねばならなかった、それらを意味と一致させなければならなかった、 - 今彼はそれらをただ提供された型と一致させる必要があるだけだ、機械的に調整する必要があるだけだ。そして彼はすべての罪からの無罪を言い渡されている。 - しかしまた世界発

展からも」(II/283)。「しかし道徳はこの職業の中にあれ。良いこととより良いことの間で選ぶことが問題となっている。そこに生がある。しかしより良いことは、君の最高の結果があるところから、理解されなければならない」(II/320)。

法律。「つまり法律は良き人々に報酬を与えるために、不正な人を罰するためにあるという狂気の中に。それらがただある種の秩序の保持のためだけにあることを知る代わりに」(II/324)。

精神は風景をどう考えるか。精神の活動を促進する風景はあるか。ホールは、オランダ、ハーグで『覚書』を書いた。「オランダ。砂の地面と粘土の空気」(VII/106)。「風景 - 私は、山岳が現実的に精神にとってそんなに有益であるのかどうか自問しはじめる。衝動が存在している。 - しかしこの上昇するもの、遮断するもの。… 最善の天候は促すような天候ではなく、中立化する天候である。空っぽだが、まだ反対派を形成していないそれ、これが精神にその純粹さを残す。精神を硬化や過剰上昇に駆り立てない。理念はすべてをしなければならない、そして自分のもとにとどまる - その結果、理念は、人が後にそこから自然を取り去るとき、虚弱ではなく、リアルである。／もし風景(風景の質、肯定的なもの)が精神にとってとても有利であるならば、偉大な精神のそんなに多くが悪い風景の中に滞在したことは、驚くべきことだろう。オランダのそれよりももっと空っぽの風景は存在しているか。スピノザはいつもここにいた。パリ周辺の風景は、はるかに良いというわけではないが、パリには他のどの都市におけるよりもっと多く偉大な精神が生きていた。／肯定的な風景はどこにあるのか。地中海の海岸、アルプス、 - アルプスはまだ誰にも意義を与えなかった。しかしニーチェはひょっとしたらアルプスによって、それが避けて通ることができなかったよりも、数年早く狂気になった。／山岳、空に向けられたしかめっ面! - / われわれの精神の誕生もまた、そのような空に向かって突き出ている形成物である、きらめく歯である。一つの静かに何も言わない風景は今、それらにおける突き出ているもの、薄いもの、虚弱なものを高めない、それらの毒を高めない、しかしそれらをおそらくそれらの堅固さの強化へと駆り立てる(それらが空をもっと強力に脅かすことができるように)。／素晴らしい自然の、精神的労働への影響はこれであると、思う、つまり、誤りが忍び込む、そして人は誤りを許す。／人は高山を、精神的な飲み物のように、任意の分量で、作用させることができるべきだろう。(人が望むならば、止めることができるべきだろう)。 / - しかし朝、ニーチェがジルス-マリアで目覚めたとき、そのぞっとするような、輝く、突き出ている山岳はすでに再びそこにある。 - - 何も彼の夢の、熱に浮かされた、しかめっ面のような形成物を冷さない ... / それに対して誰かが荒野の中で目覚めるならば、彼の硬くそびえている精神的形成物、彼の夢の形成物は溶けようとする - そして溶けるだろう、あ

るいはもっと堅くハンマーで加工されなければならない。／－そして常に新しい、内的な必然性がそれをますます堅く接合する補助を与える、それが抵抗するように。(荒野に抵抗したものは、時に対しても抵抗するだろう)。スピノザの作品はそのように建てられていないか」(XI/123)。『覚書』は「最大の荒野」の中で書かれた。ホールは精神のために荒野を求めた。彼の部屋が修道院的な空間となったように¹⁷⁾。

7 苦悩と死

ホールは精神が現実遭遇する様々な局面における精神の活動の軌跡を描写している。それは摩擦によって起こる火花のようである。精神は抵抗がなければ、何の痕跡も残さない。抵抗がなければ、そもそも精神は活動しない。だから『覚書』は苦悩や死という大きな限界に対する対処の方法を巡る思索となる。最大の危険は、市民社会の通俗的なモラルや過酷な外的条件ではない。精神は今までそしてこれからもそのような条件に曝されてきた。精神にとって所与は常に反精神的なものである。そうではなく、「最大の精神的な荒野の中で」とは内面的な危機である。あるいは時代の危機は個人の内面の中で生きられるので、個人と世界の状況は互いに媒介されている。『覚書』は、ヒトラーが政権を取った1933年から始まっている。ホールは当時オランダにいたが、世界は暗い谷間にあった。ホールは世界の危機を自分の精神の中で苦悩したので、『覚書』はその時代の一つの精神の証言、精神史となったのである。それは、「危機があればそこには生ずるのだ 救う力も また」(ヘルダーリン、『パトモス』)まで苦悩され、考えられた。

どの事柄も、その論理に従って限界まで考え抜かれ、生きられなければならない。「不幸だけではまだ不幸全体ではない。問題は、人がどのようにそれを耐えるかである。人がそれを悪しき形で耐えるときはじめて、それは完全な不幸になる。／幸福だけではまだ完全な幸福ではない」(II/333)。良く耐えるとは、精神の活動を促進するように、否定的な状況のベクトルを転換することである。「この単純な非生産的な存在にとって苦悩はただ一つの損失を意味している。この人間は、苦悩が決して一つの損失を意味する必要がないことを理解しなかったのだ。－彼は苦悩を物質的に把握している、決定されており、不変で、一個の

¹⁷⁾ 他に、いくつかの精神のレッスン。「腕を伸ばしきったとき、人は力を持たない」(II/69)。「カール・クラウスのもっとも重要な文は次のようである、〈良き見解は価値がない、誰がそれを持っているかが重要である〉」(II/56)。「ある重さを持ち上げる際に。もし君が力を尽くすならば、その結果は条件に依存している。しかしもし君がそれをしないならば、君に依存している」(II/196)。「私は地上に友人を必要としている。空の中にはない。空の中に私はいずれにせよ十分持っている」(VII/167)。「絶えず重いものから、軽いものの方へ、－生き生きとしたものの方へ身を転じることは難しい」(VII/142)。

石の塊に似ているものとして。むしろ苦悩は獲得あるいは喪失のための一つのチャンスであることを理解しなかった。他の言い方をすれば、苦悩が問題となっているのではなく、われわれがそこから何を作り出すかが問題となっている。それを洞察しない者、苦悩自体が問題となっていると思っている者にとっては、以下のことが妥当する、彼はすでに一方に、喪失に決定したのだ」(II/169)。

人が生から何を要求するかではなく、人は生から何を要求されているか。苦痛からも精神は何かを引き出すことができる。「多くの、恐らくは大抵の人間たちは身体的な苦痛を一つの異物として、絶対的なものとして考察している、彼らは、苦痛がそもそも人との関係において存続すること、人が調整することができること、人が話しに加わらねばならないことを知らない」(XII/44)。「苦痛を覚悟しているということ、苦痛から逃げたり、苦痛と戦ったりしないということ、そうではなく苦痛を受け入れること - 苦痛を考えること。人が苦痛を完全に受け入れ、考えることによって、人が苦痛と同一化するに従って、人はふたたびもっと強力になる」(II/95)。人は苦痛や苦悩のイメージに苦しめられている。そのイメージから自由になり、あるがままに見よ。「人は苦悩を取る去ることはできない(全体において)、しかし苦悩に関して苦悩することは許されない」(XII/94)。

精神活動の不調は、別の精神活動によって乗り越えられた。苦悩も同様である。「苦悩。〈彼の苦悩と彼はただ一人である〉。正確に考えると人は彼の苦悩とただ一人でなければならない。 - 完全に苦悩する人は、必然的に完全に一人である。ただ幾人かの人だけが、苦悩を追い払う一つの強力な手段を持っている。もっと強い逆流によって除去すること。／人が〈分かち合われた苦悩〉と名づけるものは、決して〈分かち合われた苦悩〉ではない、そうではなく、一つの喜び(それは一致から来る)によって減少された苦悩である。／苦悩における関与は人が一部を引き上げるということではない。そうではなく、もっと大きなものによって苦悩を克服する(減少させる)ことである。／というのは、喜び、それは - 分かち合えられる。それは奇妙であり、一つの重要な確認がそのことに起源を取ることができる。それはそこから明らかにする、苦悩と喜びは反対物(反対物は似ている)ではなく、異なった本性のものであると」(II/157)。この苦悩のナルシズムはカフカにとっても妥当すると思う。

苦悩の克服の一つの方法。「最大の苦悩は常にひそかな苦悩である。苦悩の克服への、いづれにせよ破壊への道は、第一に自分の前での公表である。／今しかしほとんどの苦悩も、人がそれを明瞭に見るとすぐに、多くの他の人たちもすでに持っている苦悩であることが明らかになるので、それはもっと高い程度に減らされる、その苦悩の可視性がそれにとってもっと大きくなり、もっと高い程度で、人自身の前で闇の中から外に出る可能性を獲得すること

によって。／その道？。(というのは、常に道の問題、個別における道、一番近い道の問題が存在するからだ。… 苦悩を受け入れること、完全に引き受けること。というのは、人がそれに抗して戦う限り、一片の否定がそこにはある。そして完全な肯定がない限り、苦悩は暗闇から外に出ることはできない。一片が秘密のままである、だから作用し続けている)」(II/167)。

しかし苦悩は続く。「いったいこれらの苦悩の海は最高の結果によって正当化されているのか。 - おそらくそうではない。一つの道が頂上によって正当化されないように」(II/331)。精神がある限り、苦悩は続く。「人間は努力をする限り、迷うものだ」(『ファウスト』)。それにもかかわらず、歩き続けること、それが精神の力である。

貧困はホール伝説のauraである。彼の母は製紙工場の所有者の娘で、父はスイスで最初に自家用車を所有した牧師であった。その両親とはホールは1920年代にパリで最後会って以来、絶縁状態にあった。ホールは彼の著作によってはほとんど収入がなかったので、主として家(仲介的な役にあった母方の叔父)からの援助で生活していたが、ペン、インクや紙が買えない時期もあった。しかし貧困は精神的労働者の常態である。「すべての精神的労働者は常に掛けて働く」(XII/67)。「なぜ、人類の最大の教師がいつも失業しているのか」(XII/67)。「金銭の苦境(困窮によってゆだねられていること)の中で魂の尊厳を維持することは、並はずれた力が属している。芸術家はそれができる」(II/163)。

ホールの方法は認識である。彼は貧困を自然現象のように観察する。「お金の欠乏について / 生産は他のものとともに生まれるのではない。生産は君たち自身の状況の中から建築されてあれ! … しかしどのように人は、常に持続している自分自身の状況をまだ認識できるのか。人間が自分をただ行為によって認識できる、つまり他のものごとへ作用することによって認識できるように、一つの状況は、他のものごととの境界によってその表現(化学の意味で)に到達できる。 - そして一つの状況が自分自身の認識なしには生産的になることができないということは明白である。／決してその状況にいなかった人にとっては、お金がない状況を想像することは、この上なく難しいだろう。／この事柄において最も嫌なことは、もっとも頻繁に見過ごされた。自分自身がこの手段喪失の状況に、だが短い間だけいるととても多くの人々は、この状況をその持続的作用において想像できない。 - この状況の作用はつまり持続によって甚だしく変わるのである。／ただ短く続く苦境は、たとえそれが繰り返されても、自由意志で引き受けられた苦境の何かを持っている、その苦境は、周知のようにすべての心理的な作用と同様に真の作用を欠いている」(II/259)。

ホールはほとんど自分については語らないが、『覚書』を書いていたときのオランダ時代の日常の記録がある。「日々の年代記 … 一つのそんなに長く続く恐怖の時。ぞっとする

ようなむしばむ咳のL, 日を追ってガスがない, 私の空間には光がない, 石油ランプ。(そしてもし私が, それを書いたとき, 同じ状態がさらに10カ月も続くことになったのを知っていたら!)。食べるものは何もないのも同然だ。飲み物もない。破壊された衣服, 寒さ, 窒息させる家, そして外出することの不可能性。私の作品に取りかかる代わりに, ぞっとする手紙で日や週をこき使う必然性(それらの手紙はそれから役に立たなかった), 家の解約の持続的な脅威。誰とも話すことが可能ではないこと。郵便はない。一枚の食糧配給券。そして遠方から, まったく間接的に, 2か月前に一つの知らせが到着した, 私が近い関係を維持してきた二人の友人が二人ともドイツに閉じ込められているという知らせが」(VII/158)。

状況は認識されれば, 何らかの道が見えてくる。「別の日々の年代記。／解決は, 私が苦勞すること, 私が破産するまで働くことである。ゲーテの言葉に従えば, <どのような種類のものであれ, 無条件の活動は, 結局, 破産させる>。／人間の栄養の本質は人間の生産性の中にある。／すべての生活は一つで, みんな同じだ。(一つの完全に働く読書であり, ただほとんどいつもゲーテ)。私の生活は, 独房の生活にもっと近い。人がある場においてどれほどわずかしかなければ必要としないか, 一人の人間が何によって養われるか。一人の囚われの男は私をすぐに理解するだろう。／私は今, 有意義に - 自分の本質の完全な肯定とともに - 企てられているものを生産性として把握する。歩くこと, 話すこと, 似たようなものごとと<働くこと>の間に私にとってはいかなる隔たりも存在していない」(VII/159)¹⁸⁾。

「飢え」。ホールは, 否定的な状況を肯定に転化させる。「人は, 人に欠けているものの認識から飢えを作る。／この飢えは創造的である, それは刺激し, 建てる。この飢えは, 私たちに, そこへ私たちが通常は行かなかったであろうものごとへの道を導く。飢えは一つのとても眩しがらせる意義を作るので, われわれは高い程度に, われわれの力をそこに指揮する。そしてわれわれは, われわれの(有機的な, 初期の)困難にもかかわらず, われわれの中の独裁的な命令の結果, この歩行のために通常作られた人(関係の中で, 一人の親和した人)が発展させた, 発展させることができたであろうよりももっと高い力をあの方向に発展させる」(II/278)。精神は常に肯定する。

孤独。「私」, 「固有性」のところで見たように, ホールの精神は常に孤独である。ホールは「今日まだフランスに生きているというあの<すべてのロシア人の皇帝>と私の間のある種の類似性」に言及している。「われわれ二人ともたいそう孤独に存在している, 人間たちの前で滑稽に存在している, われわれが, 他の人たちが見ない一つの王国を自分の中に持つ

¹⁸⁾ 「貧困」からホールの「部屋」のイメージははじめて理解される。「リアルなものは, 存在しなければならぬ一つの部屋の中にある。閉ざされており, 照明されており, 小さすぎず, 5時から6時に朝の食事を与えられている, 冬には暖房されており, 飲み物と水が与えられている, 毎日。(テーブル, 小さすぎないそれ, 紙など。自ずと明らかであるが)」(VII/170)。

ているから。相違は(…),彼においては、かつてあった一つの王国が問題となっており、私においては来たるべき王国が問題となっている」(VIII/38)。

しかし精神活動の観点から孤独のナルシズムは批判される。「〈誰もが完全に一人である〉。それはとても賢く響く、だかそれは真理ではない。われわれ - 進歩した者、あるいは閉じ込められた者 - は、他の人たちがおそろしく怠惰であるときにのみ、孤独である」(II/326)。ホールはまた、エドモン・ジャルーを引用する、「人間の孤独について語ることは、一つの常套句である。この孤独は他の多くと同様に、幻想であることを認める必要がある。というのは、人は、まったく他の人から異なっている場合にのみ、真に孤独であろうから。(…)われわれはこの孤独についての幻想を、われわれのエゴイズムに負っている、精神のわれわれの怠惰に、われわれの愚かさに、あるいは他人に対するわれわれの悪意に負っている」(XII/57)。「最も偉大な人たち、孤独な人たちは世界への信頼を持つ人たちである。- 一人の兄弟に対するように」(XII/148)¹⁹⁾。

しかし精神にとって最大の危機は内面の危機、「絶対に気が乗らないこと」である。「絶対に気が乗らないこと - それはすでに狂気ではないのか。絶対に気が乗らないことが何であるか、そのようなものを経験しなかった人に説明するのは難しい。／もし人を誘うべきものが次々と魅力のないものとして明らかになり、君が、永遠の鎖の中で … そのように続くだろうことを発見するならば。全体的なメランコリー」(XII/141)²⁰⁾。

それはどう認識され、克服されるのか。ホールは、呻きとともに絞り出されたような文を書いている。「決心 気が乗らないこと。 / それに先立ったひどく恐ろしい夜の後で、つまり、私がついに深く眠り始めたとき、それからしかしすぐに、ナイフで刺すことのように見えるものによってたたき出されたとき - そして今、私にいつも欠けていたもの、決して達成されないように見えたものがすべて次々と、あるいはまた一緒に私のそばを通り過ぎて行ったとき、そしてまた、私を毎日苦しめたもの、明らかにその持続と変化の見込みのなさのゆえに、各々の生を抑圧しなければならなかったもの、緩やかな確実な仕方で私を息切れさせなければならなかったすべてが通り過ぎて行ったとき - そして私が、私がまだ

¹⁹⁾ 注 10) のカフカの言葉は、この「エゴイズム」(孤独に示されるナルシズム)の批判としても解釈される。モンテーニュにとって孤独は自由と重なる概念である。「裏店、あるいは時代遅れの店を保存しておくことが必要である。すべてのわれわれのもの、自由なすべてを。その中にわれわれはわれわれの真の自由を、主要な避難所と孤独を確立するのだ」(第一巻、第三章「孤独について」、『覚書』の IX/20 で引用されている)。

²⁰⁾ ホールはそこで「ディングー Dingy のヤギ」という寓話的な物語を語る。家畜小屋の中に長く閉じ込められていたヤギが外に出され、錯乱する。「それはヤギにとっても恐ろしい効果を及ぼし、そのヤギはすべての可能な動物の特性を持つようになった。その外の途方もなさ、信じられない、もっと明るく輝く、多様な世界がヤギをこの上なく驚かしたのだ」(XII/141)。このヤギはホールのパロディである。それについては Sabine Haupt の詳細な解釈がある。Vgl. Haupt: Ebd., (5.3.1 Interpretation der Notiz XII/ 141), S.221ff.

表現できなかつた、そしてそれを表現することが恐らく誰にも成功しないだろう、あの全体的な、気が乗らないことによって襲われたとき。／だから眠り込む瞬間に、人が沈み、滑り落ちるとき、…そしてまさに〈私はもうできない〉とともに、それが、その全体的な気が乗らないことが突発し、窒息するかそれとも溺れる人のそれのような跳び上がるものが起こったとき。つまり、どのように、さらに引き続いて…（今までいつも救ってきたもの、中心的な事柄）書くか、作品をつかみ、運ぶか？ - その時、私は認識した、認識が私の前に浮かんだ、暗く-明るく、天国的に、ほとんど言うこともできない形で - /それらは、快楽から起こらない、ある種の苦痛による促進から起こらないということ／そうではなく。／そしてこの表現されえないもの、あるいはここでは表現されえないものを体現するために、この二つの燃えている（…）思い出が現れた。私がかつて〈同じように喜びと苦悩から離れている、あの創造的な深さ〉について読んだある文の思い出と、もっと不正確に知っているだけだが、誰かがパスカルについて書いた別の文の思い出、つまり、別の誰かが投げ捨てた重荷を彼は自分で背負い、喘ぎながら、めらめらと燃えながら、それとともに山を登って行く、という文。／そして私の観念は、その二つの思い出の中に表現されているそれは、私とその恐ろしい夜の考察と状況の中にもう見出すことができなかつたもの、見出すと思わなかつたものを再び私に与えた。それは、自分の信仰によって再び救われた、信仰者にとって正確に同じようであったに違いない。／それはここで起こっていることの言葉である。一つの新しい感覚性。あるいは、最初は到達するのが困難な場への、より深い - より根本的な、より確定的な - 取り付け *Installation* …」(XII/142)。過去の言葉によって媒介されているが、ホールがここで言おうとしていたことは、どんな状態にせよ、positive（肯定的に・積極的に・実証的に）生きる「決心」、精神の力への信頼であろう。ホールが社会的に承認されたのは晩年であるが、彼は生涯、妥協せず自らの意志を貫いた。彼の生はこの言葉を実証したのである。

ホールにとって認識 - それは事柄を言語によって十全に表現することと等しい - は克服と等しい。「すべての出来事の主要線の一つ。苦悩の克服、苦悩を外面化することによって」(II/94)。「知性の試験 - 人がどの点に関して知性の強さを測定できるか。人間が一つの極端な（直接的に脅かす）苦境に置かれているならば。どの程度、いま理解力を当てにしているかに関して」(VII/105)。「もしわれわれがそれらを名づけるならば、ものごとは大抵の場合、終わってしまう。 - 苦悩と良きものごともまた」(II/96)。「苦悩の克服のために。一羽の鳥 - が毎朝早く殺人的にぞっとするような厚かましきで屋根の上で叫び始める。つまりできるだけ速く受け入れること、完全に肯定すること。そしてすでに私は感じている。そして同時に私は、人間のすべての外的な事情は、世紀から世紀へと、またそれと

は異なっていることはあり得ないと感じる。私はかつて、人が溺れさせることのできないコルクについて語った、そしてそれは神であると主張した。しかし今私は知っている、それは人間であることを」(II/111)。

ニーチェの運命愛 *amot fati* をホールの言え、[彼は運命を少し軽減しようとし、何かを落とさせ、そしてすべてはますます困難になる。彼は運命をもう軽減しようとし、彼の上に落ちてくる重荷を彼は受け入れる、彼はますます多くものごとを受け入れる、そしてすべてはますます容易になる」(XII/108)。

精神は世界を肯定する。そして世界は精神を肯定する。「しかしこの名状しがたい労苦を誰も測らないと彼は言った。しかし彼らの中で最も偉大な人、世界はそれを測った」(II/177)。その世界は、現在のばかりでなく、過去の世界でもある。そして孤独は、過去の遺産の発見によって克服される。例えばゲートによって。「私が孤独から非孤独の中へととても大きな歩みの一つをした瞬間はそのようであった。／私がつまり、私の 30 歳の時に、私がいとも思い出すであろう部屋の中で、ゲートの『箴言と省察』をはじめて手にしたとき、長い闇の後で、闇の中の中断されなかった労働の後で、何によっても支えられず、いかなる光によっても照明されず、少なくとも精神的な外部世界のいかなる現象によっても肯定されず。／ - その瞬間はそのようであった、そしてそれは他のようであることはできない。／一つの岩の覆いが割れる、光がさらさらと中に落ちてくる、そして人が創造したすべては、本物であることが明らかになる」(XII/144)。ここでホールは『覚書』(その形式)がゲートによって承認されたと考えている。人間が今まで生きてきたことの記録である過去の遺産に自分をつなぎ合わせることによって孤独は克服される。

謙虚は苦悩からしか学ばれないものである。「重く打たれた芸術家は謙虚である、彼がもたらす肯定的なもの、彼が何度も要求しながら、身をささげる圧倒的な、肯定的なものを見て、仕事をする芸術家は。／業績は離反させ、謙虚は結び付ける、そして残るのは、悲しいことの何かである。／〈私は失われた愛を静かに嘆かねばならない、それは私を温和に、譲歩的にした、そして輝かしい時代よりも社会にとってより快くした〉(ゲート、『詩と真実』)」(II/279)²¹⁾。

²¹⁾ 私はここでロラン・バルトの『恋愛のディスクール』の[夜]の項を思う。バルトは、神秘主義の「影の中にある」と「闇の中にある」の区別を用いて、恋愛における「夜」を描いている。「わたしはひとり、瞑想する者の姿で、(…) あるがままのあの人のことを心静かに考えている。一切の解釈を中断し、無・意味の夜に入り込む。欲望は震え続けている(…)が、なにを占有しようとも思っていない。非・利得の夜、目に見えぬ微妙な消耗の夜。そのときわたしは影の中にいるのだ。わたしはただ、黒々とした愛の内面に、心穏やかに腰を下ろしているのである。(…)そして夜は暗く夜が夜を照らしていた」。(ロラン・バルト(三好郁郎訳): 恋愛のディスクール・断章。(みすず書房) 1984年。258p)。内面に深く潜航する身振りは精神に固有のものなのである。ホールは「夜」について書いている。「何に対しても良いものではない夜 - いずれにせ目に見えるような印象を与えない - はしかしその特別な光を持っている。人が後に良き時、肯定的な時にもう見出すことの

苦悩を肯定するとは、苦悩を承認することではない。苦悩を精神活動を促進するために利用することである。精神の活動のためという観点がないと、人は苦悩を克服できない。ゲーテも苦悩した。「彼はゲーテのもとでも労苦を見るところまで至った。そしてその時、はじめて正当に、人はゲーテを理解する、と私は思う」(XII/64)。そしてその苦悩を経て、「喪失が多ければ多いほど、輝くものはいっそう輝くに違いない。すべての中の肯定するものは肯定する。否定するものは一緒に消える」(II/234)。

かつて精神的な意味で苦悩した人の言葉が、また救済をもたらすのである。「広大な荒涼さの中でかつてラムツの一つのカッコに入れられた文が私を慰めた。〈偉大な記号であるところのもの〉、一つのちっぽけなランタン。／フェルナン・シャヴァンヌの一つのポートレートから。〈すべての陰謀や功利的な運動の仕方もできなくて … そして彼がついに死んだということ、多数の未完の作品を残しながら（他に多くの原稿）、彼は常に書くことを続けたので（偉大な記号であるところのもの）、〈企てを持つために希望する必要もなく、頑張り続けるために成功する必要もなく〉」(VII/171)。

精神の力は、人間の生への信頼である。「諸条件。何年も前から私は、そこにおいてとても原始的な条件の一つあるいは幾つかが満たされないままでとどまったであろう3日間を続いで体験したことはなかった。最高の、活気を与えるものごとについて語っているのではない。そうではなく、とても普通の、名づけることのできる、変わることのない、いつでも一枚の紙片の上に組み合わせることが可能なものごとについて - 照明、気温、朝の食事 -」(VII/172)。物理的な生存が維持される条件さえあれば、精神は働くことができるのである。純粋な精神的労働にとって物質的な欲望はない。

死

精神は苦悩の相対性を認識し、そこから克服の道を探ることができた。しかし死は人間の絶対的な条件である。精神は死をどう考えるか。最初に、ホールは「死」の現象を描写する。「死はわれわれを驚かす。もし死が偶然に一つの勝利の状態の中のわれわれに出会うならばそれは暴力性の印ではない。死は大抵の人たちを屈する人たちとして襲う、そして彼らのつまらなさの印は、死が、決してと言っているほど、彼らを他の仕方では襲うことができないだろうということである」(XI/23)。

観察はホールの最初の方法である。死をありのままに見ること。「悲しいこと。／私は、以前から生の終わりをいつも素晴らしいものとして想像した、偉大な肯定を可能にすること

できない光、人が容易に忘れることかできる光、色の失せた過去の中に容易に見過ごす光を。その過去の無力さを人は今一人で思う。夜の中から光を取り出すこと」(II/14)。「しかし一つの偉大なことはその夜を持っている。人は夜の中で見続ける」(II/39)。

として …。今、私は、それが何でもなくを学ばねばならない、緩慢に死ぬことを学ばねばならない、すべての手段が徐々に減少することを、先取された半分の、それから四分の三の死ぬことを、すべての可能性の限定されることを、また内的な可能性の、また全体的なもの可能性の、勝利の可能性の限定されることを。／それは単純に終わる、それが始まったように、隠されたものの中で終わる、そしてそれを見たものは誰もいない」(XI/21)。

誕生も死も、それが絶対的条件であるにしても、生の他の瞬間たちと同じ価値を持っている。死を日常の一つの出来事と考えれば、「死を迎え入れる際の唯一の至福の感情は、疲れである。／人が死に対して持つことができる、積極的な種類の、唯一正当な感情(快感)は、祝日の優しい疲れの感情。／その他の点で、その問い、大きな問いは、死を迎え入れることができる、全体として死を迎え入れる(耐える)ことができるということである。そこに別のことが付け加わる。死の登場とおそらくは結び付いていることが可能である差。その際に善なるものが存在しているならば、それはただあの疲れの感情であることが許されるだけだ。骨の折れる一日の後に眠り込む前のように」(XI/29)。そしてホールは夢想する。「もし死がローマ人の場合のように友人との会話の中で来ないとすれば、－雷雨の中におけるよりも美しい死が存在するだろうか。上からの火、火と空、二つの精神的なものたち、結び合わされて」(VII/133)。

ホールはロマン派のように死を劇化しない。人生の一コマのように受け入れている。死が問題となるのは「生」との関係においてである。「あれこれの人たちが死んだということ、この事実は私の中にとっても鋭い豊饒さと呼び起こした。それは私の中の実体を強化した。－それは世界への視線をもっと強力に、差し迫ったものにした。恐ろしい世界への視線、そしてその中ですることが問題となっているものへの視線」(VII/156)。

そして死をどう考えるか。「出発点。死という事実を認める。／死と決着をつけなかった人、その人の生はそれほど価値がない。死と決着をつけなかった人はどのように生きることができるのか。正しく生きなかった人、彼はどのように正しく死ぬことができるのだろうか。それは死を完全に自分の中に捉えている言葉である。／そんなに悪く生きた一般的な人たちがそんなに悪く死ぬことは不思議だろうか。(悪く生きる、つまり常に真に働くことなしに)。／人は生を通して以外の方法で死を理解できるか」(XI/1)。

「死」は生の事柄となる。「賢人にとって、－現実的な尺度を知っている人にとって、－死はいつも現存している。彼は死を否定しない、死から逃げない、死を恐れない。彼は死とともに、死の隣で生のすべてのものごとを見る、そしてその秤は均衡状態にある」(XI/26)。「*おお主よ、どの人間にも彼自身の死を与えたまえ*」(『時禱集』)とリルケは叫んだ。*〈どの人間にも彼自身の労働を与えたまえ〉*と私はむしろ聞きたかった。／*〈与えよ!〉*？。

今、問いは誰がそれを与えるべきかということである。われわれはいったいなぜ与える人を必要としているのか、それを受け取る人間たちはそれをすでに持っているのか。／自分自身の死。しかし〈汝をして戴冠させよ〉と人に叫ぶことが、何の役に立つだろうか、君はむしろ彼に戴冠に至る道を示すべきではないか。／固有の労働には必然的に固有の死が続くのである」(I/9)。

思考は死から生へと転換され、冒頭の「生は短い」に戻るのである。しかし「死」を経た後の生についての思索は、それ以前とは審級が一つ上にある。「死を始めることを考えること。一つの基礎として - 君がそこにいるという事実のように - 君は死を取るべきだ。死は一つの全体的な事実である。／ただこの最も単純なことが君から要求されている。あらゆる君の行為の中で、死が一つの全体的な事実であることを意識していること。／どのように君の力は高まり、世界の中へ方向を取るか。どのように突然、見ることの光線が君の中から現れ、世界を越えて行くか。／君は作用をする、君は色を見る、君の生は一つの価値を受け取る」(XI/18)。

死について、「われわれにとってそこには何も研究するものはない」(XI/18)。死を考えることは畢竟、生を考えることに他ならない。「しかし幾つかの偉大な真理を、このこの上なく単純な事柄(死の考えはわれわれの思考の始まりでなければならないというような)を何度も瓦礫の中から取り出し、〈披露する〉必然性が私にはますます緊急のこととなる。／それが芸術を決定している。それを〈披露すること〉はただ常に新しい形式によって可能になる。今のリズムに呼応している別の語順、今の言葉、今の関連付け。／ものごとの完全な一致によって克服する」(XI/2)。「死」を考えるとは、死を自分の言葉で、固有の仕方では表現することである。ホールはプルーストの「祖母の死」の描写(「ゲルマント家の方へ」)を引用し(IX/120)、また死の直前に彼の祖母と一緒に歌を歌った夢を描いている(X/7)²²⁾。

「死」を表現するとは、自分を死の上位の審級に置くことである。「もし真の知恵の最初で最大の段階がいつでも死の準備をしていることであるならば、それは、死に対して何かをコントロールできることである。／どのような瞬間に人は最も多く準備ができていたのか。最高の生の瞬間に。生がより多く減少すればするほど、死ぬことはいっそう困難になる。そして死の実践的な問題は、人間たちが彼らの生をそんなにも減少させたということである」(XI/17)。

²²⁾ 「書くこと」は死の克服の試みである。バルトは書く、「或る晩、母の死後、私は、ヴァレリーが母の死に際して心から願ったようにただ自分だけのために、母を偲ぶささやかな本を書こうと思ったのだ」(ロラン・バルト(花輪光訳): 明るい部屋。(みすず書房) 1980年。75p.)。バルトはまた子供の死に際してのマラルメのことを書いている。「息子の死の前にして、マラルメは書かんがための両親の役割分担を甘受している。〈母は泣き／わたしは考える〉」(『恋愛のディスクール・断章』。150p.)。

生の中の死のレッスン（死の準備）についてホールは述べる。「生の中には、死と同じように作用し、小さな死のようである多くの小さな事件が存在している。その小さな死の連鎖を人は減少と名づける、とりわけ外的状況による減少と名づける。最良のことは、それをまた無視すること（わきにおく、否定すること）である、大きな死を、終端にある死を無視するように」(XI/22)²³⁾。

ホールは死の克服について考える。「最高のもの。最高の素晴らしさ、最高の幸福とは何か。主観的な思考が突然客観的な思考に転化するとき。それは正確に、その中で人が死を克服した、そのような瞬間である」(I/7)。「鋭い観察者は、彼が最終的に死ぬ前に（個人的な最終死、人がただ通常に死と名づけているものの前で）、正確に死と知りあいになる。どの成し遂げられた業績も彼から分離されること、－それが鋭い角度で彼と別れ、世界の中に入って行き、ますますよそのものとなり、それがあつた瞬間についに客観的にそこにあるまで、一者が他者に対して、創始者と成し遂げられたものがすでに客観的に向かい合つて立っているまで－それはそのすべてのイメージである、同じ経過である。完全に客観的であるという道、物たちの中に入って行くことの道。それは唯一の道である－そこには死はない」(XI/14)²⁴⁾。

精神は人生のすべての局面において働いている。その精神の活動をホールは記述している（精神のクロニクル、精神史）。どの局面におても、認識は克服の道となる。最初の「生は短し」は、「死」と円環を形成し、始まりに戻る。死の克服は、「生」の肯定である。

8 生 作品

おそらく生を否定する人間はいないだろう。豊かな生を誰もが望むだろう。ホールは、しかし、言う。「人間は豊かである義務を持っている」(II/25)。ホールは、生が与える、精神活動の豊かな可能性を人間は実現しなければならないと主張するのである。しかし、それを

²³⁾ それはヴァレリーの考えである。「私は、私が私自身の生の中に、死の数子のモデルを持っていることを忘れる。日常的な無のモデル、驚くべき量の空隙と中断 *suspens*、よくわからない、無知の驚くべき量の空隙を」(XI/14)。

²⁴⁾ ホールはもっと平易にも表現している。「死は本来、そもそも理解するのが難しくない、あるいは死には理解されるものがほんのわずかしか存在していない。誰もが、説明されれば、理解する、つまり、人は、謎を解くことなく、死を受け入れなければならないこと、誰も別の条件を持っていなかったこと、この条件とともにわれわれはもっと大きな栄光への接近を持つこと、すべてのわれわれの生はその中で行われること、この境界の内部で向こうの方へ建築すること、最良の仕事をする、個人的なものを越えて行き、常に持続するものと結び付けるだろう最良の仕事をする、そこにおいてわれわれの生が演じられるだろうこと－あるいはものごとの中に入ることに於いて。その際にわれわれは、これがその都度起こる瞬間に、われわれの思考が主観的なものから客観的なものとなる瞬間に、われわれに到達可能な最高の光を知るだろう」(XI/44)。

認識し、実行するのに人間はあまりに怠惰なのである。

世界のあらゆる否定性にもかかわらず（それらすべてにもかかわらず *trotz alledem*）、生を肯定するのは、精神の力が必要である。それをホールはシンプルに言う。「生。最初、人は悪しき瞬間を数える。それから人は嬉しい瞬間を数える。 - そしてもっと嬉しくなる」(II/13)。「完全な生の参加よりもっと高いもの、あるいはもっと集中的なものは存在しない」(II/171)。生を行動として考えれば、年齢の差異は存在しない。「年齢。われわれは、どこをわれわれが見ているかによって、その年齢の問いを決定する。いつも彼自身の時間的な青春を振り返って見る人は、いつも老いている。いつも彼の来たるべき時間的な老年を、一つのより高い完成の（可能化の）担い手として見上げている人は、常に若い、20でも、40でも、80でも」(XII/8)。老いに関しても、「人は、意志しなければ、老いることはない、人が意志すれば、人は何度も生まれるだろう。／黄金の青春時代。その黄金は私がそちらに眼を向けることの中にある、その黄金は古くならない、過ぎ去らない、私はいつもそちらを見ることが出来るから。／そして今、健康が君から遠くにあり、君が健康を見、その健康を楽しんでいるので、君は健康を以前よりも多く所有している。／君が年取るにつれて、君はいずれにせよもっと増加する。君の中で価値あるものが、上昇する、ゲーテの場合のように」(II/103)。そして確かにホールはそのように「老いた」。

私は「忍耐」、「事柄」などにホールが与えた意味は、ホールの固有の創造であると思う。そして「死」からさかのぼって見出された「真剣さ」の価値は、自分が決断し、為してきたことの肯定である。「ホメロスもまた彼の本質的なものの中において、確かに遊ぶことも、楽しませることもしようとしなかった。そうではなく、ホメロスは一つの精神を表現しなければならなかった。／すべては一つの生命力である。贅沢もない、無意味な空想制作もない。われわれには正當にそのようなものとして現れるものは、あつと言う間に、世界史の中で、その生を奪われる。すべては精神的な顔である。すべては理念を表現する試みである。(…)ただ唯一の精神的な職業が存在している、真剣な職業が」(XII/38)。「彼らは彼に言った、〈君は今、頑張る必要はない、あちらに行き、楽しめ、享樂を通して継続が生まれるだろう〉。彼が他の人たちが楽しみと名づけながらしていることをしながら、彼は絶えず、そこから彼がやってきた方を振り返って見ていた。真剣さの中を、そちらの方、再び真剣さの中を、享樂結果が導くことになっていた方を - 彼が苦勞して得ようとしていたこの享樂結果、もちろん無駄に。というのは、人が絶えず真剣さの方を、だから反対物の方を眺めているならば、いかなる楽しみもないからだ。／〈汝、追放された者、／お前の国はどこにある〉。ああ、ファウストの最も困難な旅は、悪魔と一緒に旅ではない、地獄をめぐる旅ではない - 彼は、その際に、今なお少し自分のもとにいる。最も困難な旅は、国の外部にあるだろう -

自分のもとにいることが完全になく。だから旅の容易さを通して、馬鹿げたものを通して。／われわれは死を通して生きる。最も困難なことは、国の外部の旅、自分の外部の旅である、－しかしファウストはただ自分自身によってのみ救済されるだろう、だから真剣さによってのみ。〈瞬間に向かってこう呼びかけてもよからう、留まれ、お前はいかにも美しい …〉(『ファウスト』第二部、第五幕)、これだけがそうである。／だからゲーテも楽しむことはできなかった、－少なくとも問題性なしには。／私は君たちに言う、もし君たちが子供のようになるならば、君たちは生きないだろう。／芸術家の最も困難な義務、軽快さに向かうこと、舞踏(生における)。というのは、ここで彼は彼の王国の境界に接している、死の近くで。／死が素晴らしいということは真ではない、死はただ生を贈る要素としてのみ善である」(XI/28)。「彼の旅の途上のファウストを見た誰が彼を、彼の精神性を信じただろうか。(しかしそれはファウストにとって何でもない、彼は人間によってではなく、天上の軍勢によって正しい存在になったから)」(II/35)²⁵⁾。

ファウストは人間世界の審級ではなく、天の審級によって救済される。彼が何かの業績を為したからではなく、彼が自分の精神の要請に対して真剣であったから。ホールはまた、パスカルを引用している。「もし私の手紙がローマで有罪になるならば、私の中で有罪としていることは、天上において有罪になる」(VII/139)。「天による救済」は、自分が為したこと(生=精神的な労働)の承認のことである。精神が為したこと(精神的な労働)は、世界の中で否認されようとも、自己の中で承認される。それは、天と同様に絶対的な承認である。

そして「死」は、この承認をもたらす契機である。「これは慈悲深く、素晴らしいことである、つまり誰にでも終わりにそれが与えられる、より正確には与えられたということ、芸術の中の表現として、彼の本質の中にあったもの、彼の最も本来的な能力であったものが。それは〈自然な〉のではなく、驚くべきことである。というのは、われわれの努力は、われわれに所属しているものの上か下に、外部か内部にあるものに向かっていくから。われわれの作品は、われわれが予感しているよりも常にもっと深い、－それが通常の意味でそうであることができるのとは別の仕方で深い」(XII/58)。

ホールはカフェの隠喩を語る。「(そこで一つのカフェは、今再び、それがかつてあったように、とても輝かしい。そして二度、私は最後の硬貨を支払うところだった、私は私の最後のグラスの前に座っていた、すぐに出て行かねばならなかった。さもなければ、まだ存在し

²⁵⁾ 『ファウスト』をパラフレーズしてホールは書く、「〈不純だ、不純だ〉と中級の天使たちは叫んだ。しかし最高の天の中から、一つの音が響いた、〈純粋な〉」(XII/151)。いずれにせよ、『覚書』全体は『ファウスト』の長大な注釈として読める。

ている手段で、そのカフェは完全に退屈になっていただろう。というのは、それは一つの完全に退屈なカフェであるから)。… 君が間もなく行くということ。／だから、君が間もなく行くということ、それは、全体 *das GANZE* を、生を君にとって – 我慢できるものにするばかりでなく、素晴らしくするメガネ」(XI/20)。

「死」は生を「作品」にする。「だから、生は芸術生産物に等しい、そして芸術生産物は真の生に等しい。他方に一方のように到達することは正しい振る舞いの中にある。証言を与えること、それは外面を通して内面を表現することである。要するに生を肯定することに本質を持っている、それとともに生を増加させることの中に。証言を与えることは、他者とのコミュニケーションである、働くことである」(II/119)。

生が作品であるならば、果てしなく制作することを欲する。「私は一つの作品を完成させると決して言いたくない。すべてが作品である。／〈すべてが〉、私が一人の作家のある個所に下線を引くのであれ、あるいは書き出す、一通の手紙を送る、何かをメモする、何かを考え、ある立場を取るなのであれ。この強制的に終えること、強制的に手紙を終える – この終えることは何かを殺すことである」(VII/150)。制作を続けることは、死の克服の身振りである。パスカルの『パンセ』、リヒテンベルクの『控え帖 *Sudelbücher*』の未完成は、死の克服の身振りとして解釈されるかもしれない。

生が作品であるならば、それは評価の対象となる。「彼らの実りに関して君たちは彼らを認識すべきだ」(XI/31)。「*良きもの*に関して人はものごとを測らなければならない、否定的なものに関してではない」(XI/33)。そのように測られると、「報酬は君の中になければならない、つまり業績の他の目標は存在しない、そして報酬はその中で、君が、〈私はある別の人を喜ばせるために生きた〉とすることができるならば、君の中にあるだろう」(II/24)。私が生を精神の作品にするならば、それは報酬である。そしてその報酬を認定するのは、「私」である。それは主観的な判断ではなく、ファウストの場合の「天」のような絶対的な審級である。「私」が精神の意味で真に承認しなければ、どの世俗的な業績も意味はない²⁶⁾。

この作品の概念から、「生」が改めて／はじめて見られる。それはバルザックの残した作品である。「私は、聖人たちが、もし彼らがバルザックあるいは(後期の)リルケ以上のことをしたならば、いったい何をしたのか、知りたい。バルザックのそのような生でないとしたら、いったい何が神聖だろうか。人はこの生の期間を互いに並べてみてほしい。(それはただ二つだ)。最初の部分の、果てしなく、言葉にされることのできないほど負荷をかけ

²⁶⁾ 精神の活動それ自体が、世俗的な生活がどれほど悲惨であれ、喜びであるというホールの考えは、ホールが引用しているスピノザの文のパラフレーズであると私は思う。「至福は徳の報酬ではなくて徳それ自身である。そしてわれわれは快樂を抑制するがゆえに至福を享受するのではなくて、反対に、至福を享受するがゆえに快樂を抑制しうるのである」(『エチカ』第五部定理 42)。

られた状態。その第一部において彼は一人の友人をただ星として持っていた。／第二部の途方もない、持続する、見たところすべての人間的なものを越えて行く創造的な放電と永遠の苦勞（彼の年齢の30から50歳まで）。それから死が入ってきた、まさに見通しが到達されたときに。そのような眺めの前に泣きわめくこと以外に何かがあるのか」(II/165)。「生の意味への問い。／ある人間たちは完全な否定に至ることができない、すべてを無意味とみなすことができない。全体がなおそんなに脆弱で、怠惰であるにしても、今なお、人が助けることができる子供や少年が存在している。(- それどころか、幾人かの人たちが様々な時に、私を助けてくれたのではないか、私に幸福をもたらし、何かを与えたのではないか。どのような経験によって、どのような認識によってこの事実は廃棄されることができるのか、起こらなかったものとされることのできるのか)。それはすでに一つの意味にとって十分である、そして全体は前から始まる。ヘルダーリンはそれを言っている、〈神の力を信ずるのは／おのがうちに神を宿した者のみだ〉(『世の喝采』)。どうしてそこにバルザックがいた(いることができた)世界において世界が無意味となるだろうか」(II/22)。

生の意味は与えられるのではない、生の意味を作るのは、各々の個人なのである。

生は各々の人間の作品である。ホールの生のイメージはしかしニーチェの「永劫回帰」が示すような激烈なものではない。生は道、流れである。「常にそれは道である(これは段階である)。〈生の意味と愛〉。第一に、人は、誰も助けてくれない、助けに来てくれないことを見る、(人が困っているとき。困窮なしには人はそもそも何も見ない)。／第二に、人は、人自身が逆の場合に異なった(助けに来ないあの他のすべての人たちとは異なった)振る舞いをするのかどうかと問いを置く。／第三に、この問いに答えることに、ある別のもっと大きな問いへの答えが依存している。世界は一つの意味を持つことができるか、生は生きるに値するか、という問いに。／そして見よ、第四に、人が他の人たちとそんなにまったく異なっているということは必要ではない。(人が、他の人たちが外から見えるような様子とは異なっているということは)。一つの個所で、向かうことの炎は燃えなければならない。一つの理念に対する愛(より高い種の中の人間の進歩することへの愛)は確かにそれを支持している」(II/23)。

ヘラクレイトスの「万物は流転する」、ベルグソンの「生の躍動」とは異なり、ホールはメタファーで語っている。ホールの生の流れは、時間はただ前と後ろがあるという、自然科学の即物的なそれに近い。時間の流れは客観的である、それに人間の主観が参加し、客観を残す。それが生である。

死を人間の条件と考え(「生は短し」)、生きる(精神の活動をする)。死から生へのこの転換を可能にするのが精神の力である。だから「死の術」ではなく、「生きる術 Arte Vivende」。

「人はいつ闇を克服するのか。人が闇を受け入れるとき、ただその時にのみ、その時、完全に。生の問いはしかしこれである、つまり人はその際に無為に陥らないということ。／不滅のもの。途方もない、不滅の、真鍮製の用具に等しく。人はそれを少し磨く、その時それは全く少しの間、輝く、それは精神的な活動である。(それはだから、本来の意味で生産することではない、そうではなく、思い出の中に休むことである、一つの元気づけること、一つの示すことである)。一つの断片 *FRAGMENT*、一つの断片は常にわれわれの行為 *Tun* である、われわれすべての行為はそれである。過ぎ去ることのないものに関してほんの少しの行為。過ぎ去ることなく存在しているものに関して、ほんの少しの奉仕。－ 川の流れるようにわれわれのそばを疾走して過ぎていく不滅の存在者のわきで。われわれは岸辺に立っている(また少しばかり一緒に歩く)、そしてわれわれははかない存在である、不滅の存在はそばを疾走して過ぎ、永遠である。－ ただわずかの部分だけ、われわれは一緒に歩く、われわれは立っている、というのは、われわれははかない存在だから。－ というのは、まさにそれが変わることのない永遠の本質なのだ、永遠が行くこと、永遠が変化することが。そしてわれわれは遠くまで行くことができないので、われわれは立ち止まるので、とどまりたいので、それゆえにわれわれはほとんど永遠に所属していないのである、われわれはとどまらないのである。／もし君が、君が決して死なないと感じたことがなかったならば、君はもちろん、加わって意見を述べるものを何も持っていない。／それは、すべての書くことのための、最も極端な、最も内的な、最も厳密で、最も普遍的な規範である。自分が永遠であるということを見なかった者は、語ることを何も持っていない。／われわれははかない。前者、全体的な不滅のもの(流れ)とわれわれの自己との統一の中から、意義が、燃える個所が生まれる。本質的に統一から、本質的に二つのものからわれわれは成立している。… / 死ぬがよい!、だが、一度永遠の中を見よ。死につつある中で永遠の中に入っていくな。だから、生の中で一度、向こう側を眺めた者として、死ね。／(そのように行け。－ その時、君は陽気にサヨナラと言うことができる。彼の生の中で一度向こうの方を眺めた人として。陽気に君は、－ というのは、生は無ではないから－、他の人たちに言う、－ ごきげんよう。何という甘美、この行くこと)」(XI/12)。

これは東洋的な円環的時の流れでも、死後に永遠の中に入るキリスト教的なそれでもない。生は時の永遠の流れに東の間だけ参加するのである。それ故に生は一層輝く。「人間は生をただ周囲に向けることができるが、産出することはできない。／生はすでにそこにあり、歩き続ける、すべてのものを通り。君ができることはただ、意識の事柄、意志の事柄、形式を変えることの事柄だけである。人は、人が彼らの方を向く、彼らの手伝いをするなどのときにのみ、子供たちと結び付いている」(XII/50)。

ホールはそれを出産のメタファーで語る。「われわれは常に一つの意識である、一人の遠方の参加者である。われわれは生を持っていない。 - ある人は、驚いて知覚する - 思い出す -、彼が何かを外に置いたままにしたことを。一つの大きな切片、人形、一つのもの、一つの誕生。一人の女に子供が生まれるとき、それはそのようなものであるかもしれない、そしてもっと深い意味で、それは他のようにはあり得ない。女は子供をどこかに投げ、子供は彼女から落ちる、彼女はそれを知らない、そして生の永遠の連鎖が継続される - それは誰か、それは何か。彼女は一瞬、その参加者だった」(XII/9)。

生の一つの表現としての流れよりもむしろ、ホールは運動としての「流れる」のイメージに魅了されているようだ。「われわれは常に、普遍的にそこに存在しているもの、流れて行くものの一つの一時的な統合である。… - 一瞬のあいだ人は果てしない色をまとめてイメージにすることができる、それは最高の人間的な業績、最も個人的な業績である。すでにすべてはふたたび、位置を変える、同じことが他のように作用する、同じイメージが同時に異なった仕方でも作用する、各々の別の照明のもとで異なって作用する」(XII/127)。

あるいは羊の群れの通過のイメージ。「生の本質、われわれの中をものたちが通り過ぎていくこと、あるいは逆に、われわれがものたちの中を通り過ぎていくこと。羊の群れは秋に村の中を通っていく、銀色に、山から来て、平地の中に行きながら。 - この通り抜けていくことは私をこの上なく喜ばせる。そのすべてはたいそう真実である」。「異文。／通過。ものごとの本質。 - われわれ自身が歩く、あるいはいわばわれわれの一つの内的なものごとの中を通っていく。この内的なものをわれわれは通り抜けて流させる、通り抜けて行かせる。われわれは決して保持することができない、あるいは所有できない。／美しい川の中で常に新しい貫流が交代する、そのような人は幸いなるかな。／それは時々秋に、白い羊たちの一列が、山から下りてきて村を通り過ぎていく、そのような通過である。羊たちはどこへ行くのか。鳥の群れが空気中から現れながら、空気中を通り遠方に向かうように。すでにその村は秋のようにきらめいている。銀色の群れは通り過ぎていく。／人間が体験することができる、もっとも至福なことは何か。主観的な思考の中から客観的なものへの転化である。私はもう疑うことができない、それはすべての尺度を越えていることである、最高のこと、そこから、今まで人間のもとで現れた、すべての最高の光が現れ出たものである。あるいはもっとよく言えば、そのような光として最高の光は、数千の形式の中で現れた。それはまた死の克服に他ならない」(XI/15)。

「流れ」が意味することは、大いなる肯定である。「もう一度、私は半睡の中で、日中の手段ではほとんど再現されることができない何かを見た。そこでは明晰で至福的であったものが、ここでは不可解なままでとどまっている、それが複雑なものの中へ消えて行くというよ

りもむしろ、それが単純なもの、この上なく単純なものの中に漂い消えていったので。 — 私は見た、そんなに醜く、苦悩に満ちて現れるものが、どんなに公正であるか、どんなに醜くなく、正しいかを。そんなに失われて現れるものがどんなに失われているのではないかを。数千回も苦悩と試みが、緊張が、正しくないものでわれわれの知覚が貫かれることが存在しなければならぬということ、最後に、少なくとも千回の試みの後で、少なくとも千回の意志の表明の後で一人の人が上に向かって登場するまで。これがまったく自然の中にあること、自然法則であること、最も実り豊かな出来事に劣ることなく、まったく生産、肯定であること — 健康的であること、そして、ただ一つのことだけが憂慮すべきで、遺憾であること、つまりその反対のこと、もしある人が意志することを止め、〈不健康な〉非一致 *Un-Ein-sheit* の緊張から退却するとき」(XII/150)。

ホールの思想はシンプルである。生の意味は与えられるのではない、人は自分固有の意味を世界と歴史のそれぞれの所与の条件の中で創らねばならない。人は自分の生の価値を創り出すことを生から要請されている。その創造行為をホールは精神の労働と言う。そして精神的労働者にとって生はあまりに短い。永遠の時の流れへの生の束の間の参加、それが精神の作品である。精神の労働こそ、生の喜びであり、意味である。その意味は完成された作品にあるよりはむしろそれに至る道、個々の歩みの中にある。「すべてが作品である」(VII/150)。

次のテキストを使用した。Hohl, Ludwig: Die Notizen. Erste Auflage (suhrkamp taschenbuch 1000) Frankfurt am Main, 1984. そこからの引用は、本文中に「章」数と項目の番号を記した。『覚書』の前身にあたる『ニュアンスと細部』を東北学院論集 教養学部の第170号と171号に訳出したので、読んでいただければ幸いである。ドイツ語による「要約」は長くなってしまったが、内容に関しては本稿と同じである。主としてドイツ語の原文で構成すると、ホールの言う解釈の「線」が異なった様相を見せ始めている。別バージョンとしても読めるだろう。

Ludwig Hohls „Die Notizen“ lesen Denken 1)

Zum Nachdenken über „die Notizen“ teile ich sie in zwei Teilen von Denken und von Ausdruck ein. Aber „die Notizen“ bestehen darin, dass Denken und Ausdruck untrennbar miteinander gebunden sind. Das Denken muss so ausgedrückt werden, dass dessen Ausdruck dem Denken gewachsen sein kann. Der Ausdruck des Denkens überprüft das Denken. Es kommt auf den Ausdruck an, weil es nicht Philosophie, sondern Weisheit ist, die Hohl behandelt. Diese Weisheit ist „allgemeiner Ausblick, Ahnungshöhe dem Gesamten gegenüber.“ Sie ist nicht mitteilbar. „Während es sich in der Sache der Weisheit nur darum handelt, ein schon Dagewesenes wieder zu erreichen.“ Und die Weisheit zu beerben heißt, „die höchstmögliche Durchdringung der wissenschaftlichen Erkenntnisse mit deinem Leben, mit dem Leben deines Bewusstseins, einem Leben, das vom Bewusstsein herkommt und zu ihm strebt, das viel von Bewusstsein hat“ (Vom Erreichbaren und vom Unerreichbaren. In : „Nuancen und Details“). Die Weisheit ist die Erbschaft des Wissens der Menschheit, die bisher gelebt hat. „Die Erbschaft. Es ist nur dadurch möglich, dass man ähnlich erlebt, das Unausprechliche in den Sätzen jenes Mannes wiederfindet. Dass man vom Gesamten aus jene Sätze wieder bilden kann und somit, mit gleicher Mühe, entsprechende neue. Wenn man aus eigener Kraft eine große Nähe erreicht hat, dann springt der Funke herüber“ (II/203). Es ist Hohls Methode, vergangene Sätze zu lesen, deren Denken nachzugehen, und weiter fortzusetzen. Hohl versucht, den Prozeß mit der gleichen Intensität, die dem Denken entspricht, auszudrücken.

„Die Notizen“ sind eine Sammlung von vielen Fragmenten. Indessen sagt Hohl, „Wenn durch die Fragmente der Strom geht, sind sie eben nicht mehr Fragmente, dann ist das Gesetz wieder da“ (VII/146). Er deutet die Linie an, die durch das Ganze geht. Hohl selber hat die geschriebenen Notizen zurückführend aufgebaut und fordert den Leser auf, die durch das Ganze gehende Linie zu finden. „Ein Mann schreibt dir, dies ist kein Brief, sondern dies sind einige Notizen und Auszüge, zusammenhanglos aneinander gereiht. Du aber, der Empfänger, fassest es doch als Brief auf“ (XI/16).

In „Die Notizen“ handelt es sich darum, die Tätigkeiten des Geistes zu befördern. Nach dem Hohlschen Begriff des Geistes soll der Geist stark sein. „Jene, die «eine Welt» in sich tragen (schöpferische Menschen), es sind größere Quantitäten“ (XII/21). Der Geist ist positiv. Der

Geist ist autonome Bewegung. Der Geist ist reflexives Wissen. „Die Größe des Menschen liegt im Erkennen seiner Geringheit, der Relativitäten, d.h. Beziehungen in der unermesslichen Nacht um ihn“ (II/104).

Attribute des Geistes

„Die Erkenntnis rettet uns“ (XII/16). Die meisten Sätze Hohls sind nicht Definition, sondern Aufforderung zur Tätigkeit des Geistes. „Worauf es ankommt, ist nicht, kolossal viel wissen. Sondern, zur richtigen Zeit das Richtige wissen“ (II/200). Die Tätigkeit des Geistes heißt Sehen: „alles durch Beobachtung“ (XII/76). Es gibt eine negative Seite des Sehens, d.h. „die vergoldende Ferne“ (XII/11), was bedeutet, dass die Ferne der Zeit Details undeutlich macht. Es ist die Phantasie, die den Übergang der Erkenntnis zur Tat ermöglicht. „Phantasie ist das Vermögen, sich ferne (andere) Verhältnisse richtig vorzustellen“ (XII/57). Und der Geist verbindet. „Denn der Geist führt hinüber, ist also synthetisch wie eine Brücke“ (XII/128). So, wie Hohl viel Zeit brauchte, um die geschriebenen Notizen zu verbinden, verbinde ich sie auf meine Weise, was zugleich ein mich aktivisierendes Lesen ist.

Hohl hält den Geist für diejenige Kraft, die Vernunft, Erkenntnis, Wissen, Phantasie in sich vereinigt. Und der Geist handelt in der Welt, wobei er From durch Widerstände und Reibungen erhält. Das ist ein endloser Prozess. „Dass die Dinge im richtigen Moment übertreten vom Handeln zum Erkennen, vom Erkennen zum Handeln, rettet die Dinge“ (II/264). „Die Rettung besteht nur in der Kommunikation mit Menschen“ (II/50). Dann „identifiziert man sein eigenes Geschehen mit dem Weltgeschehen“ (XII/98). Die Spur, die der Geist in der Welt zeichnet, ist „Geistesgeschichte, Biographie des Menschen“ (XII/52). Ich lese eine Umrisslinie der Geistesgeschichte in „den Notizen“ und zeichne sie nach.

Ich

Der Geist ist kein abstrakter Begriff. Hohl bezeichnet sich als einen geistigen Arbeiter. „Die Notizen“ wurden geschrieben, während der dreißigjährige Hohl mit dem Leben rang. Eine intensive Innerlichkeit durchdringt sie. „Mir war allein wichtig, unter dem mir von Außen Begnenden, das hervorzuheben, was mit meinem Geist in einer starken Beziehung stand“ (Einleitung zu IX). „Der Ort der Realisierung menschlicher Macht ist beim Einzelnen, nicht beim All“ (II/174). Im Fall von Hohl bedeutet das: „Das wahre Kriterium, dass einer ein Schriftsteller sei, ist, dass einer in sich eine unbesiegleiche Vehemenz habe, auszudrücken“ (IX/61). So hat Hohl angefangen. Zentripetale Kraft zum Ich legte ihm zwar „die schwere Panzerrüstung“ (II/260) gegen die Außenwelt auf, aber er hat im Alter von 18 Jahren zu denken

begonnen, indem er „Versicherungen der anderen völlig übersah“. „Denken ist vor allem Mut“ (VII/166). „Sich selbst sein“ ist für Hohl der größte Wert. „Ein wunderbarer Ausdruck : Ich bin bei mir“ (VII/64).

„Unabhängigwerden : ganz und gar nichts nachfragen Staat und Familie, überhaupt der Meinung der Menschen. ICH BIN lautet die Rede des Lebens“ (VII/143). „Ich“ ist das Subjekt des Geistes. „Jede positive Kraft ist nicht zu besiegen. Positive Kraft heißt eigene Kraft“ (XI/39). „Mein Wort heißt voll verantwortet von mir“ (I/8). Mit meiner eigenen Kraft, mit meinem Wort auszudrücken, was „ich“ denke, das macht „Die Notizen“ aus. Und dann, „Alles, was du bist, wirst du einst sein“ (XII/152). Das „Ich“ wendet aber sich an die Welt. „Ich bin, und weil ich bin, sollst auch du sein“ (II/ 64). „Sind jene, die das Werk empfangen, keine ändern?“ (II/146). „Das gute (richtige) Denken leitet automatisch zu den ändern hinüber“ (II/ 269). „Und zuletzt glaube ich immer noch an eines, an die Welt. Die Welt ist die Größte aller Persönlichkeiten“ (I/38).

Praxis

Für Hohl ist der Wert des Menschen, „dass der Mensch Wert will. Wert wollen ist identisch mit dem Arbeiten“ (I/3). Und für die Arbeit ist das Leben zu kurz. „Eigenes Tun, zu dem dich innere Gewalten nötigen, das einzige, was Leben gibt, was retten kann. Der richtige Weg ist die Entfaltung der vollsten Tätigkeit, die uns möglich ist“ (I/1). Er erwähnt drei Stufen des Arbeitens, „die große Idee. Die der großen Idee entsprechenden Einzelvorstellungen. Die den Einzelvorstellungen entsprechenden Einzelausführungen“ (1/19). Er hält Einzelausführungen für am schwierigsten. „Tue diese einzelnen Dinge langsam im Maße deiner Möglichkeit, deiner Kräfte nur, eins nach dem andern. Dein Leben ist verändert. Die Worte, die einer der gewaltigsten Revolutionäre im entscheidendsten Augenblick gefunden haben soll, hier stehe ich, ich kann nicht anders. O lieber Freund Mensch, das Leben ist nicht so schwer“ (I/20).

Hohl erzählt verschiedene Lehren für den einzelnen Grad der Arbeit. Etwa „Dass wir durch Produzieren wachsen, nicht durch Ruhe“ (VII/20). Oder die Methode : „Es ist nicht Kraft, was den guten Schwimmer macht, sondern das Vertrauen in das Element, das schon körperlich gewordene Vertrauen“ (I/10). Die Idee von Sachen : „Eine Sache, und die Technik des ergebensten Dienstes an dieser Sache haben“ (II/284). Fleiß, Anstrengung, Geduld, die Werte, die seit langem behauptet sind, hält Hohl für die Erbschaft der Menschheit und erzählt davon mit eigenen Worten. „Geduld. Die Welt prüft uns durch lange Zeit hin. Punkt um Punkt“ (V/24). „Das eben ist das Geheimnis der Anstrengung, daß sie das bewirkt, was sich gar nicht berechnen läßt“

(VII/145). Oder durch die Metapher des Bergsteigens : „Unser eigentliches Ziel ist der Weg. Die Größten sind nur die größten Wegkundigen“ (II/36). Zur Einsamkeit bemerkt er : „Wer die Welt nicht souverän ausschalten kann, ist nicht befähigt zur Kunst. Die Kunst will wirklich die erste, die alleinige, höchste Gebieterin sein“ (XII/121). Hohl will sich zum Organon des Geistes machen, und das ist die Aufgabe, die jeden Augenblick des Alltags auferlegt ist.

Der Geist im Alltag

„Wer sich nicht selbst disziplinieren kann, der bringt es niemals zu einer geistigen Leistung“ (II/ 194). Über Alltag und Umgebung, die die Tätigkeit des Geistes am meisten befördern. „Dass unsere gewöhnlichen Alltagserledigungen sollen mechanisch geschehen“ (I/17). Geist und Aussehen, : „Dass eben dieses Klotzige, Irdische das war, was die ganze Figur bewahrte“ (II/322). „Die größten Kräfte gewinnt man durch Abbrechung aus ihrem Ursprungsgebiete - durch Exil“ (II/27). Hohl erzählt die Tätigkeit des Geistes im Sinne des Mythos von Sisyphos. „Der Stein ist das Leben, das geistige Leben, das ewige Leben ,das es zu erhalten gilt“ (VII/23).

Die Abwesenheit der geistigen Tätigkeiten bedeutet Unglück. Das zeigt die Kritik der Moral der modernen bürgerlichen Gesellschaft. Über Faulheit : „Da gehen sie lieber eine Stunde beten, als eine Minute zu denken, so faul sind sie“ (II/128). Über Langweile : Die Leute verbringen umsonst „ihre Zeit, die wenige Zeit, die ihnen, wie allen Menschen gegeben ist. Warum werden ihnen die Sorgen nicht eine Stufe zur Höhe?“ (XII/104). Für Hohl heißt der Ungeist die Sache über den Gott. „Gott ist vor allem ein Produkt des menschlichen Nichthandelns“ (XII/132). „Mir ist es durchaus klar, dass es keinen Gott gibt. Aber es gibt die Welt, das ist schon wunderbar genug“ (XII/35). Über den Geistlichen : „Mißtraue den seit langer Zeit Geretteten!“ (II/ 116). „Die Moral ist dazu, den Menschen seiner Pflichten zu entbinden“ (II/ 324). Die Gesetze „sind lediglich da zur Aufrechterhaltung einer gewissen Ordnung“ (II/324). Anschließend an die Landschaft in den Niederlanden, wo Hohl „Die Notizen“ schrieb : für den Geist ist „das beste Klima nicht das treibende, sondern das neutralisierende. --- Die immer neuen, inneren Notwendigkeiten geben den Zuschuß, es (das geistige Gebilde) immer fester zu fügen, dass es widerstrebt“ (XII/123). „Die Notizen“ wurde „in größter geistiger Einöde“ geschrieben. Hohl suchte nach der Wildnis für den Geist, weshalb etwa sein Zimmer (der Keller) wie eine klosterhafte Einzelzelle aussieht.

Leiden

Hohl zeichnet die Bahnen des Geistes, der verschiedenen Situationen in der Welt begenet.

Der Geist muß notwendigerweis sich mit den Bedingungen des Menschen, Leiden und Tod auseinandersetzen, was zugleich eine Geistesgeschichte wird, weil der Mensch durch die Welt vermittelt ist. Jede Sache muss konsequent nach ihrer eigenen Logik bedacht und belebt werden. „Das Unglück allein ist noch nicht das ganze Unglück. Frage ist noch, wie man es besteht. Erst wenn man es schlecht besteht, wird es ein ganzes Unglück“ (II/333). „Dass es nicht auf das Leiden ankommt, sondern darauf, was wir daraus machen“ (II/169). „Man darf nicht am Leiden leiden“ (XII/94). Wir können leiden, indem wir „die Schmrzen annehmen“ (II/95). „Die Leiden zu verscheuchen, durch einen stärkeren Gegenstrom zu beheben“ (II/157). „Ein Weg zur Überwindung des Leidens ist Bekanntmachung in erster Linie vor sich selbst. Da nun aber beinahe jedes Leiden sich als eines erweist, das viele andere auch haben“ (II/167).

Hohl läßt alle Negativitäten in Positivität umschlagen. Die Armut ist eine Aura von Hohls Legende, ist aber Normalzustand des geistigen Arbeiters. „Es gehört eine ungemeine Kraft dazu, in der Geldbedrängnis die seelische Würde aufrecht zu erhalten. Der Künstler kann das“ (II/163). Hohl beobachtet die Armut wie eine Naturerscheinung. „Es wird wirklich außerordentlich schwierig, für diejenigen, die nie in dieser Lage waren, sich die Lage der Geldlosigkeit vorzustellen“ (II/ 259). „Ich fasse nun alles, was sinnvoll, mit voller Bejahung seines Wesens, unternommen ist, als Produktivität. --- zwischen Wandern, Sprechen, ähnlichen Dingen und «Arbeiten» besteht für mich keinelei Kluft mehr“ (VII/159). Über den Hunger: „Hunger ist schöpferisch, reizt und baut. Dieser Hunger führt uns Wege zu Dingen, zu denen wir normalerweise nicht hingegangen wären“ (II/278). Einsamkeit: „Die Größten, die Einsamen sind, die Vertrauen zu der Welt haben. - Wie zu einem Bruder“ (XII/148). Aber die größte Gefahr ist für den Geist „die absolute Lustlosigkeit“ (XII/141) und hier ist auch der Satz aus der Vergangenheit rettend: „Erinnerungen an einen Satz, den ich einmal gelesen habe, «von jenen schöpferischen Tiefen, die gleich entfernt sind von Freude wie von Leid» und einen anderen Satz, von jemand über Pascal geschrieben. : Die Last, die jeder andere abgeworfen hätte, nimmt er auf sich und keuchend, flammend steigt er damit den Berg hinan“ (XII/142).

Der Entschluß, trotz Alledem positiv zu leben, heißt das Vertrauen auf die Kraft des Geistes. „Wenn wir sie nennen, sind die Dinge meistens vorbei“ (II/96). Die Sprache setzt das Wesen der Welt voraus. Die Rettung kommt aus der Welt. „Aber der Größte unter ihnen, die Welt, maß sie (diese unsäglichen Anstrengungen)“ (II/177). Die Lektüre von Goethes „Maximen und Reflexionen“ läßt „die Notizen“ und deren Form anerkennen. „Alles, was man

geschaffen hat, zeigt sich als echt“ (XII/144). Sich anzuschließen an das Gedächtnis davon, dass die Menschen gelebt haben, die Erbschaft des Menschen, ermöglicht die Einsamkeit zu überwinden. Die Kraft des Geistes ist Vertrauen auf das Leben des Menschen. „Seit Jahren habe ich nie drei Tage nacheinander erlebt, an denen nicht eine oder mehrere der primitivsten Bedingungen unerfüllt geblieben wären“ (VII/172).

Tod

Wenn ich so ausdrücke, dass die Zitate durch meine Interpretationslinie sich verbinden lassen : In dem Tod „gibt es für uns nichts zu studieren“ (XI/18). “Bewußt zu sein, daß der Tod eine totale Tatsache ist. Wie deine Kraft sich erhöhen und Richtung nehmen in die Welt! Dein Leben erhält einen Wert“ (XI/18). “Auf die eigene Arbeit folgt notwendigerweise der eigene Tod“ (I/9). “Das «an den Mann bringen» ermöglicht sich nur durch eine immer neue Form : andere, dem jetzigen Rhythmus entsprechende Wortstellung, jetzige Worte, jetzige Bezugnehmung“ (XI/2). An den Tod zu denken, heißt, den Tod mit eigenem Wort und auf eigene Weise auszudrücken. Hohl sagt, man sei am meisten bereit zum Tode „in dem Augenblick des höchsten Lebens“ (XI/17). Was die größte Herrlichkeit, das höchste Glück ist : „Wenn das subjektive Denken plötzlich ins objektive umschlägt. Das ist genau ein Augenblick wie der, in dem man den Tod überwunden hat“ (XI/7).

Leben und Werk

„Der Mensch hat die Pflicht, reich zu sein“ (II/25). Reichhaltige Möglichkeiten der geistigen Tätigkeiten werden vom Leben gegeben, um zu erkennen und auszuführen. „Höheres, oder Intensiveres, als volle Lebensteilnahme gibt es nicht“ (II/171). Es kommt auf den Ernst der Sache an. „Erlöst wird Faust doch nur durch sich, durch den Ernst also“ (XI/28). „Faust wurde nicht gerecht durch die Menschen, sondern durch die himmlischen Heerscharen“ (II/35). Die Erlösung durch den Himmel heißt die Anerkennung dessen, was man getan hat, die der geistigen Arbeit. „Der Lohn muß in dir sein“ (II/24). Und der Tod bringt die Anerkennung. „Daß jedem am Ende das wird, genauer, geworden ist, als Ausdruck in der Kunst, was in seinem Wesen gelegen hat, was sein eigentliches Vermögen war“ (XII/58). Der Tod macht das Leben zum Werk. „Leben ist gleich Kunstprodukt ... Zeugnis geben, das ist Darstellen eines Innen durch ein Außen“ (II/ 119). Hohl drückt die große Bejahung des Lebens aus. „Die Frage nach dem Sinn des Lebens. Wäre das Ganze noch so morsch und faul, so gibt es immer noch Kinder, Junge, denen man helfen kann. Ja, haben mir nicht doch auch mehrere geholfen, zu verschiedenen Zeiten, Glück gebracht und etwas gegeben ? Das genügt schon wieder für einen

Sinn und das ganze fängt von vorn an. Wie sollte eine Welt je sinnlos werden, in der ein Balzac gewesen ist?“ (II/22).

Hohl erzählt bildhaft das Leben. Das Leben ist, „ein winzig kleines Stück Dienst am unvergänglich Seienden. Ein Fragment“ (XI/12). Oder „Durchgang. Das Wesen der Dinge. Wir selber gehen oder ein Inneres von uns geht durch die Dinge hindurch. Das sind Durchgänge, wie manchmal herbstlich ein Zug weißer Schafe durch Dorf ziehen, von den Bergen kommend, — Schon erglänzt das Dorf herbstlich. Die silbrigen Scharen ziehen hindurch“ (XI/15). Flüchtige Teilnahme an dem ewig Fließenden. „Alles ist Werk“ (VII/15).